映画に宛てたラブレター

２０１２年版

天見谷行人

ようこそ、レッドカーペットへ

ようこそ、レッドカーペットへ。映画が大好きな、あなたのご来場を心からお待ちしておりました。
えっ？　特に好きって言うほどでもない？　結構ですよ。大いに歓迎致します。これから映画の魅力をご一緒に探ってゆきましょう。
この本は、２０１２年１月１日から１２月３１日までに私が映画館で鑑賞した、洋画１８本、邦画１９本を収めた映画のレビュー集です。各作品私の独断と偏見による５点満点の採点をつけてみました。レンタルビデオ店でDVDを借りるときのご参考にでもして頂ければ嬉しいです。
あなたのお好きなように、どこからでもお読み頂けるように、一作品一ページにレイアウトしてみました。
また、予告編のアドレスも掲載致しました。コピーしてお使い下さいませ。
巻末には、２０１２年の映画マイベスト５も選んでみました。
ご案内役はわたくし、天見谷行人が務めさせて頂きます。
ではごゆっくり、映画の森をご散策下さい。また、映画館でお会いしましょう。

ミッションインポッシブル　ゴーストプロトコル

２０１２年１月６日鑑賞

＊＊＊トム•クルーズのおいしいアクションレストラン＊＊＊

人気のアクションシリーズ、「ミッション・インポッシブル」
シリーズ作品の中で、今回はアクションやエンタメ性など、全体のまとまりがとてもよかった感じがしますね。
調べてみたら監督は、僕の大好きな「レミーのおいしいレストラン」を監督したブラッド・バードさんじゃないですか。
これはいいですよ。
今回が初の実写映画の監督だそうです。
主人公のイーサンはあくまでもヒーローで「何があっても死なない」というアクション映画のお約束はしっかり守って作ってくれてますよ。だからこっちは安心して、どれだけドキドキハラハラさせて楽しませてくれるのか？　という所を見ていけば言い訳ですね。
今回はイーサンの乗る車にも注目ですね。
００７シリーズにはボンドカーがありましたが、それと同じように「M・Iカー」とでも呼べる様な車が登場します。どうやらBMWがPRもかねて全面協力しているみたいですね。
この車の安全性などもアピールしたかったのでしょうね。トム・クルーズ演じるイーサンを絶体絶命の危機からクルマが救います。企業イメージにとって美味しい演出です。
ちょっと気になる女優さんが出ていました。イーサンの敵方になる金髪の女性。レア・セドゥー。この女優さん、個人的に好みですねぇ。今後もっと作品に出てほしいなぁ。
それに「ハートロッカー」で主演を務めたジェレミー・レナーも出てますよ。緊迫感のある、いい演技してるんですよ、この人。終盤のトム・クルーズとの絡みのシーンも印象に残ります。
派手なアクションと明快なストーリー、スクリーンに映えるスター達の共演、そしてちょっぴりウエットな「ラブ」と言う名の 香辛料をチョイチョイ、とふりかけたこの作品。
料理に例えると、ディナー程のボリュームとか、重厚さとはちょっと違う感じです。お腹にもたれない感じに出来上がった、誰でも気軽に楽しめる高級レストランのランチ メニュー。そんな感じの作品ですね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
美術　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　ブラッド・バード

主演　　トム・クルーズ、ジェレミー・レナー、サイモン・ペッグ

製作　　２０１１年　アメリカ

上映時間　１３２分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=lE8300sv0oM&feature

２０１２年１月１３日鑑賞

＊＊＊ポンコツでもいい、父親は強くあってほしい＊＊＊

ロボット格闘技を通して、失われた父と子の絆を取り戻してゆく、その姿がとてもドラマチックに描かれた、近未来SFアクションストーリー。
映画に爽やかなエンディングをお望みの方にはお勧めの作品と言えます。
この作品を観ながらぼんやり思ったのは、アメリカはもう一度、強い父親像を求めているんだろうかという事です。
離婚して子供を手放してしまった父親。
彼はロボット格闘技で日銭を稼いでいる中年オヤジ。
　別れた奥さんが亡くなり、一人息子を引き取るのは自分か、それとも裕福な親類か、彼は選択を迫られます。
親権の優先権は自分にある。ちょうど格闘技に使うロボットが壊れた所でした。
結局彼は、実の息子との生活よりも仕事を選びました。
息子を親類に譲る代わりに１０万ドルの大金を手に入れます。これで再びロボットが買える。格闘技がやれる。
　引き取った親類がイタリア旅行をする間、彼はひと時、実の息子を預かる事になるのですが……
　「僕を売ったんだね」という息子。この子役さんの不機嫌な顔がとてもいいと思いましたね。
　その少年はあるポンコツロボットを見つけます。その名はアトム。
　この旧式のロボットにはある特徴がありました。人間の動きをそのまま真似る事が出来る。つまり人間の分身になる事ができる。映画の終盤、この機能が素晴らしい奇跡を生み出します。
もうお分かりのように、この作品、手塚治虫氏の「鉄腕アトム」や浦沢直樹氏の「PLUTO」、 それに名作「ロッキー」等を合体させ、焼き直した作品なんですね。
終盤のロボットチャンピオンと旧式のロボット「アトム」との闘い。
これなんかスタローンが、最強のチャンピオン「アポロ」に立ち向かってゆく、下町のロートルボクサー「ロッキー」のまんま、パクリです。
　ただあくまで父親とは何をすべきか？
アメリカにとって父親らしい父親とはどうあるべきか？
という事にとてもこだわった視点で作られている作品だなぁと感じました。
　この作品の他の国での評価が聞いてみたいものですね。それぞれの国でのそれぞれの父親像が違うでしょうから。
　日本のかつての家父長制度を今持ち出したとしたら、一笑に付されてしまうでしょうが、アメリカだけは、なんだか楽天的にその辺りの復活を本気で考えているんじゃないか？
そんな事を考えさせてくれる作品でした。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆

美術　☆☆☆

音楽　☆☆☆

総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　ショーン・レヴィ

主演　　ヒュー・ジャックマン、ダコダ・ゴヨ、エヴァンジェリン・リリー

製作　　２０１１年　アメリカ

上映時間　１２８分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=xTO6dJlbDqk&feature

J・エドガー

２０１２年３月３日鑑賞

＊＊＊権力の頂上、バベルの塔から見える景色は？　＊＊＊

さすがクリント・イーストウッド監督と思わせます。派手な仕掛けは一切なし。
それでも作品全編に漂う緊張感が、観客をスクリーンにぐいぐいと引き込んでゆきます。
　老け顔の特殊メイクが見事に決まったレオナルド・デュカプリオ。抑制の効いた演技も魅力的です。色々と悪いイメージしか湧かないFBIのフーバー長官、その功罪にはいろんな意見があろうと思います。時にはその強引すぎる捜査手法もこの作品では描かれます。
　共産主義、その思想を極端に敵視したフーバー長官、その一方で、先進的な科学捜査の手法をいち早く取り入れ、アメリカ国民を犯罪から守ろうとした姿勢も伺えるのです。
　一人の人間、J・エドガー・フーバーを、出来る限りニュートラルな視点で描こうと言うのが、この作品の狙いの様です。
　たとえば、彼は同性愛者ではなかったのかと言う微妙な問題もあります。彼が最も信頼していた側近。その男性からの愛情を、ジョン・エドガーは受け止めま す。その辺りの描き方も、けっして野次馬根性的な、さもしい見方でとらえないところが、クリント•イーストウッド監督の趣味の良さなんですね。
主演のレオナルド•デュカプリオ、今回は若き日のジョン・エドガーと、晩年のフーバー長官を見事に演じ分けております。
必要とあらば大統領のプライバシーまで探りを入れていたフーバー長官。
彼はアメリカを影で操りたかったのでしょうか？
権力欲の固まりの様な人間だったのでしょうか？
この作品を観る限り、ひとりの人間、ジョン・エドガーは、コンプレックスを持ち、傷つきやすく、人並みに女性からの愛情を求めていたように感じられます。
　しかし、彼はその強力な意志の力で、権力の階段をどんどん上ってゆきました。そして雲に隠れて見えないバベルの塔の頂上に立ってしまったのでしょう。
　その頂きから見える風景は、意外にも雲に覆われ、何も見えず、孤独感に苛まれる様な狭苦しい場所だったのかも知れません。
　そんな彼の苛立ちをレオナルド・デュカプリオが見事に演じきっているのが印象的でした。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
美術　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　クリント・イーストウッド

主演　　レオナルド・デュカプリオ、ナオミ・ワッツ

製作　　２０１１年　　アメリカ合衆国

上映時間　１３７分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=askoLBCpx7s

２０１２年３月５日鑑賞

＊＊＊メリエス作品のなんというみずみずしさ＊＊＊

どうしてなんでしょうねぇ。
最新の３D技術を駆使して、名匠マーティン・スコセッシ監督が映画を撮る。当然いいものが出来ると思うじゃないですか。
ところが……
なぜか画が全然活き活きしていないのですねぇ。
この作品は映画の黎明期に活躍したジュルジュ・メリエスへの、限りない敬愛の念を込めて製作された事が伺えます。
エンドロールを観ていると製作陣の中に、何とあのジョニー・デップの名前もありました。やっぱりサイレント映画大好きなんですね、彼は。
この本編の終盤、映画史の上で貴重な資料ともいえる、ジュルジュ・メリエス作品の幾つかが登場すると、あら不思議。
今までの憂うつな暗い画面が、おもちゃ箱をひっくり返したように活き活きと動き始めます。
例えば……
クラシカルな複葉機の大編隊がぶんぶん飛び廻ったり、
指揮者らしい男がいて、その上には大きな五線譜があるかと思うと、次の瞬間には男の頸がすっ飛んで、五線譜の上で次々に音符になってゆきます。
あるいは、歌舞伎役者の様な顔のある白っぽいお月様。徐々にクローズアップされてくると、その顔に何と大砲の弾がズドンと打ち込まれる。
～さぞやお月さん、痛かろう～
どこかでこんな民謡調の歌謡曲が昔あったなぁ。それはさておき……
これらの奇抜なアイデアの映像が次々にスクリーンに現れて僕たちの目を楽しませてくれます。
まるでスクリーンが生命の水を与えられ、一気に潤った様な瑞々しさ。その新鮮な驚き。
まさかこのような映像を、映画の歴史が始まった当初、すでに撮影していたとは！
マーティン・スコセッシ監督が本作品を作るきっかけになったのがよく分かりますね。
映画作品というのは単に映像技術の進化でより刺激的になったり、より優れた作品になるとは限らない、という事をスコセッシ監督自らが図らずも証明してしまった形になりました。
これは何とも切ないです。
余談ですが、実際、３D映画作品の途中で、まさか寝てしまったのは、私の映画鑑賞史上、この作品が初めての貴重な体験でありました。
ただ、ジュルジュ・メリエスという、映画の歴史において絶対に避けて通れない奇才が存在したという事実を、もっと世に知らしめるには、この作品はその使命を果たしたのだと思います。
それにしても、これをきっかけに、ジュルジュ・メリエス作品の上映会なんかを、どこかのミニシアターが開いてくれないかなぁ、と思うのは私だけではないでしょう。

追伸
この作品本編で、一人やたら活き活きと動いていた人物がおりました。青い制服の保安官です。とてもいい味を出しておりました。相棒の犬を唯一の友とし、浮浪児を孤児院に送り込む事を生き甲斐にしているかの様な、偏った熱意を持った人物をコミカルに演じていて印象的でした。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆
美術　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　マーティン・スコセッシ
主演　　ベン・キングズレー、ジェード・ロウ、
　　エイサ・バターフィールド
製作　　２０１１年　アメリカ
上映時間　１２６分
予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=jSJ71pX3RdE&feature=share

戦火の馬

２０１２年３月１３日鑑賞

＊＊＊馬のジョーイがみつめた命のドラマ達＊＊＊

久々にスピルバーグ監督の本気を見た感じがした。
もういい加減、下らんアクション映画のプロデュースばかりやってないで、こういう立派な作品にじっくりと取り組んで欲しいとおもう。
それだけの力量をまだまだ維持し続けている事は、この作品をご覧いただければ誰もがうなづく事だろう。
物語の舞台はイギリスの農村。
農民たちは日々の暮らしの糧を得るために、痩せた土地にしがみつく。
荒涼とした大地 。遠景のショットがとても綺麗だ。
こういうロングショットをスクリーンで観ると、
「ああ、映画を観ているのだなぁ」とつくづく思う。
1人の農夫が村のセリ市に馬を買いにゆく。
そこで出会った子馬に彼は一目惚れしてしまうのだ。
農家に役に立つ馬は足の太い農耕馬である。しかし彼が血迷って買ってしまったのは、なんとサラブレッドの子馬。
競馬場ならいざ知らず、農家にとってはなんの役にも立たないと思われた。
家に馬を連れて帰ると、当然奥さんはカンカン。
でも一人息子はこの子馬を一目で気に入った。
少年は「この馬にだって畑を耕せるさ」とサラブレッドの子馬に「農耕馬」としてのトレーニングを施すのである。後にこのトレーニングが思わず役立つ時が来る。近所の村人たちは、そんな少年を見てせせら笑う
「サラブレッドに何が出来るんだね」と。
しかし少年と気持ちを通わせた、賢いサラブレッドの子馬「ジョーイ」は、共に一生懸命に大地を耕してゆく。
　ここのカメラワークは本当に見事だ。
鋤が大地を力強く掘り起こしてゆく。
痩せた土くれが波を立てるように鋤き返されてゆく。
ぐんぐん、ぐんぐん、突き進む少年とジョーイ。
砕氷船が氷の海を割っていくように、土の海は鋤き返されてゆく。
キャメラはクローズアップだ。
スピルバーグ監督は「ここを観てくれ！」とクローズアップを使った。
そう、クローズアップはこういう時にこそ使うのだ。
かつてチャップリンは言った。
「女優の鼻の穴を映してなんになる。カメラは出しゃばってはならないのだ」

今やカメラをおもちゃのように動かして喜んでいるカントクばかりになってしまった。嘆かわしい事である。
それはさておき、
やがて時代は第一次世界大戦に入る。馬のジョーイも軍に徴用されてしまう。
少年はジョーイを追うように志願兵となる。だが二人は離ればなれに戦地へ赴く。
ジョーイは将校の馬として騎馬部隊に配属される。
最前線。突撃に参加するジョーイ。
草原に身を潜め、敵を急襲しようとする騎馬部隊。この草原の中に見え隠れする馬達の躍動感溢れる群像。
スピルバーグ監督自身、大いに影響を受けていると認める、黒澤監督。馬を大量に使った黒澤監督の合戦劇が、正に二十一世紀の今、スクリーンによみがえったかの様だ。美しい躍動感溢れる馬の群像劇。
この作品、他にも美しいシーンが数々散りばめられていて、もうコトバに出来ない。是非スクリーンで鑑賞する事をお勧めする。
　数々の数奇な運命をたどる主人公の馬「ジョーイ」と少年兵。
　ジョーイのつぶらな瞳が見つめた沈み行く太陽の姿。
スピルバーグ監督は夕日のシーンを他の作品でも多用している。かつての「プライベート・ライアン」でもそうだった。
　戦死した部下達を埋葬するシーン。沈んでゆく夕日を見つめるミラー大尉。あのシーンも印象に残った。
本作は馬という動物の表情の豊かさ、かわいらしさ、アクションの巧みさ。思わず感情移入せずにはいられない、いじらしさ。
　映画の主人公としてスピルバーグ監督が惚れ込んだ馬のジョーイ。
　彼の瞳に映った夕日は数多くの命のドラマを見つめる。
いまのところ文句無しに２０１２年上半期のナンバーワン作品と言える。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆☆
美術　☆☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ

監督　　スティーブン・スピルバーグ
主演　　ジェレミー・アーヴァイン、エミリー・ワトソン、
　　デヴィッド・シューリス
製作　　２０１１年　アメリカ合衆国
上映時間　１４６分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=fDcgiWxF5fU

ものすごくうるさくて、ありえないほど近い

２０１２年３月14日鑑賞

＊＊＊さあ出かけよう、心の冒険に＊＊＊

あの９•１１テロで父親を亡くした少年。

　彼は今は亡き父の部屋から偶然、一本の鍵と小さな紙切れを見つけるのです。もしかすると、９•１１以前、父は家族に伝えたかった事があったのかも。それは父が遺した最後のメッセージかも。もう少年はいてもたってもいられません。

彼はとても利発な少年でした。計画性があるんです。父の残したメッセージを探す冒険に出る、それに必要なものを一つ一つ準備してゆくのです。それらを大きなリュックサックに詰め込んで、これでよし。さあ出かけよう！

いよいよ少年は小さな冒険に出かけます……。

僕はこの作品の描き方が大好きです。とてもいいと思う。

　何より９•１１テロの政治的な問題や、民族間、宗教間の対立と言った背景を、一切描かないところがいいのです。

　本作が描くのはあくまでも「ひとつの家族の話」です。

　父親を事故で亡くした少年、その事故というのが「たまたま」あの「９•１１」であったという事に過ぎないのです。

　それゆえこの作品は、とてつもなく大きな普遍性を持ち得たのだと思います。

　９•１１以降のアメリカ市民はどのような心の痛み、トラウマを背負っている事でしょうか。

　しかし、９•１１や日本のあの３•１１の大震災だけでなく、それが新聞の三面記事に載る様な、小さな小さな事件・事故に巻き込まれてしまったとしても、それによって受ける心のキズに大小などあるはずもないのです。

　刃物でバッサリと心を傷つけられたら、それは事件事故の大小に関わらず、痛いものは痛いのです。

　大事なのは心のキズは万国共通であることです。その痛みは、人種や国家、それに宗教さえも関係なく、ひとりの人間の共通の痛みなのです。

　本作の極めて優れた点は、小さく、ひ弱な一個人の心の痛み、それも少年が受けた心の痛みに着目し、キャメラを据えてじっくりフィルムを廻した、スティーヴ ン・ダルドリー監督の製作姿勢にあると思うのです。傑作「リトル・ダンサー」や「愛を読むひと」を撮った監督さんです。やっぱりいい作品作ってきますね。

　少年は様々な人に出会います。特に口のきけない老人との道程はとても素敵な描き方だなぁと思いました。

　最近僕は映画館で寝てしまう事が多いのです。ついうっかりして、うとうとしてしまう。この作品も、もし僕が眠気覚ましにガムを噛んでいなかったら、きっと眠りこけてしまったとおもいます。それほど静かなタッチで作品は描かれております。

トム・ハンクスの父親役、やっぱりいいですね、この名優は。

今、アメリカが思い描く理想的な父親像、頼もしく楽天的で、妻と子供をこよなく愛する男、そんな人物を演じさせたら何とも納まりが良いのです。
しかしです。あくまでも主役はこの少年。
トム・ハンクスを上回ると言っても過言ではない名演技をみせております。
正直僕は、この子役さんの名前も知らなかったけれど、もし僕がアカデミーの会員ならば、間違いなくアカデミー主演男優賞に彼を推したでしょう。
それほどの名演だと思います。
ちょっと地味なお話かもしれませんが、どうかじっくりと目をこらして鑑賞してみてください。
なお、同じく９•１１テロ以降のアメリカ市民の心情を描いた秀作に「再会の街で」という作品があります。こちらはアダム・サンドラーとドン・チードルが共演しております。
僕はこの作品、もう、めちゃくちゃに好きなんですね。カメラワークなんか抜群。ストーリーもいい。もしよろしければこちらも鑑賞してみてください。
＊＊追記＊＊
本作を観た後、僕も何か無性に小さな旅をしてみたくなりました。あの少年の大きなリュックサックがとても印象的でした。映画館の帰り、僕は一つのリュックサックをほとんど衝動買いしてしまいました。
僕もこれから、このバッグに自分のパソコンを詰め込んで、心の冒険に出かけたいと思っている所なのです。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆☆
美術　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　スティーヴン・ダルドリー
主演　　トム・ハンクス、トーマス・ホーン、
　　サンドラ・ブロック、
製作　　２０１１年　アメリカ合衆国
上映時間　１２９分
予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=FUFEnrB2JXo

マーガレット・サッチャー 鉄の女の涙

２０１２年３月１８日鑑賞

＊＊＊メリルはよい仕事をした＊＊＊

確かにメリル・ストリープの演技は特筆すべきものでしょうね。
かつて在職中は「鉄の女」と呼ばれたサッチャー首相を、その内面までも繊細に演じ上げております。
　ただ、残念なのはですね。僕が思うに、これ、監督の演出が完全に失敗してますね。申し訳ないね。はっきり言わせてもらうけど。
メリル・ストリープとフィリダ・ロイド監督は、前作「マンマ・ミーア」できっと意気投合したんでしょうね。だから今回もタッグを組んだ。
ただ、扱った題材があまりにも巨大すぎた感じがします。
つまりサッチャー首相を描くという事は当時の英国の政治状況を描かねばならない訳です。
監督はきっとマーガレット・サッチャー首相の内面を描こうとしながら、もがいていたのではないでしょうか。しかし描ききれない。そこをメリル・ストリープが職人芸的な名演技で見事に監督を持ち上げた形になっています。
僕が個人的に知りたかったのは、なぜサッチャー首相は鉄の女と呼ばれるようになったのか？
その生い立ちから思想信条を形作る過程を知りたかったのです。
本作でもマーガレットの青春期が”やや”描かれていますが、それは夫になる男性との出会いを描くだけです。
彼女がなぜ政治の世界を目指したのか？
その強烈な原動力となったきっかけがさっぱり見えてきません。
劇中、首相になったマーガレットのセリフがあります。
「私は闘ってきました。闘い続けてきました」
このセリフ、メリルストリープだから言えたんですね。
他の女優だったら完全に浮いちゃいますよ。
この演出では、まるで、生まれながらにして闘う本能が備わっているかの様な印象さえ受けてしまう訳です。
　更には作品序盤で多用される、老いたマーガレットと過去の回想シーンのごちゃ混ぜのカット。これは演出マズいですねぇ。
もっとうまく処理出来たと思います。
単にウザイと思ってしまいました。
　フォークランド紛争の時、その「鉄の女ぶり」が見事に発揮されますね。
　自国へ侵略を企てるものに対して彼女は断固とした「NO！！」を表明します。
　自分の言葉一つで軍隊が動かせてしまう。
そのとてつもない権力。
僕がその立場だったら逃げ出すだろうなぁ。

だって合法的に「人を殺せ！！」と言っている訳ですから。
そして、自国の軍人に「闘ってこい、命の保証はない、覚悟しろ」と。
それを言う勇気があったひとなのです。マーガレット・サッチャーという人は。
　だから余計知りたいんですね。なんで彼女が鉄の女になり得たのか？
　本作は残念ながらその鉄の女を取り巻く表面的な「現象」を描くに留まってしまいました。もちろんメリル・ストリープにその責任はありません。あくまでも彼女は役者としていい仕事をしたのです。見事に「鉄の女」を演じ上げたのです。
　メリル・ストリープの名演に僕は拍手を惜しみません。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆
美術　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　フィリダ・ロイド
主演　　メリル・ストリープ、ジム・ブロードベンド、オリヴィア・コールマン
製作　　２０１１年　イギリス
上映時間　１０５分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=djUTosfnxT4

２０１２年３月２４日鑑賞

＊＊＊惚れ込めるキャラクターだけに……＊＊＊

　またもや３D映画で眠ってしまったのです、全くの不覚でした。我ながら情けない。

　何よりマックで１４０円のコーヒーを三杯もおかわりして（２０１２年当時マックでコーヒーがおかわりできたのですよ。）粘る様なビンボー人の私が、食事を抜いてまで（イヤ、実際にはちゃんと飯食ってますよ。やってませんよ。カッコ付けただけね。）そう言う意気込みで映画を劇場に観に行っていることはご承知しておいて頂きたい訳です。

　この作品を観にいったきっかけは、まず何より予告編が最高にカッコいい！！

　このちょっと悪ぶったオヤジねこのキャラクター、いいじゃないですか。

　レンブラントの絵画「夜警」に出てくる騎士が被る様な「いなせな」帽子。
これなんか「パイレーツ•オブカリビアン」のジャック•スパロウ船長が被っても似合うんだろうな、いや、ジョニー•デップその人かな。

　そんなおしゃれな伊達男でないと、とても被れないでしょうね。
そしてこれもやや斜めに着崩した幅広のベルト。それにサーベルを身につけ、おしゃれの決めては足元とばかり、折り返しのついた長靴でバシッと決めてますね。
もちろんねこだけどアニメーションだから二本足で歩くんです。この主人公。
相棒のハンプティ・ダンプティといい、キャラクターの造形は申し分ないですね。
僕が眠りこけちゃったのは物語の後半部分から。だからそこはほとんど覚えてないんです。多分ストーリーがカッタるかったんだと思う。

　前半のストーリーは結構引き込んでくれるものがあったからちょっと残念。

　なお、日本語版吹き替えは主役のねこ、プスを竹中直人さんがやってますね。いいですよ。良くキャラとマッチしてます。

　時にしぶく、時にハチャメチャにやってくれる多彩な話術、表情を描写出来る役者さんですからね。

　僕はこの作品、もしかするとジブリの大人向けアニメの大傑作「紅の豚」、あそこのご近所まで連れて行ってくれるんじゃないかと期待してたんです。

　もちろん「紅の豚」を追い越す大人向けアニメーションなんて、そうそう出てくるもんじゃあ、ありません。それはよく分かった上でのお話ですよ。

　そんな期待を持っていただけにホント惜しかったなぁ。この作品。

　チョイ悪のオヤジねこに、胸がキュンキュンしちゃった中年オヤジの僕としては、せめて主人公のダンディズムぐらい真似させてもらおうと思ってます。

　もちろん一人酒場で渋ぅ～く、ミルクを舌先でピチャピチャやる所なんかもう最高！！

　この手の作品は、そういうちょっとした仕草、キャラクターの演技が大きく作品の出来に影響します。

　ねこ好きの僕だから言う訳じゃないけど、惚れ込めるキャラクター、オヤジねこのプスという

素晴らしいキャラクターをつくっただけに、もうちょっとストーリーも作り込んでほしかったですよね。
　次回作作ってもいいんじゃないかな、と思えてしまいました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆
美術　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　クリス・ミラー
主演　　日本語版吹き替え　竹中直人、勝俣州和
製作　　２０１１年　アメリカ
上映時間　９０分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=3N-klEuJAK4
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

２０１２年５月１７日鑑賞

＊＊＊２１世紀の「活動写真」にブラヴォー！！＊＊＊

観終わって映画館のロビーに出たときの事。
二人の女性客が話し合っていました。
「セリフなかったよねぇ～　/(o^。^o)/」
「でもストーリーわかるよねぇ～
♪♪(o=゜▽゜)人(゜▽゜=o)♪♪ルンルン」
　そう、この作品なんと、モノクロのサイレント映画なのです。
色もついてない。俳優の声も聞けないのです。
映画館でメガネをかけて３D作品を見るのは、もう当たり前のご時世。よく、こんな作品をあえて作ろうとしたものです。
　これ、フランス映画です。フランス映画界の意地を見せた一作とでも言うのでしょうか。
「いい仕事してますねぇ～」と思わず唸りたくなる程素敵な作品でした。少なくとも僕はすごく気に入りました。
この作品を創った監督はじめ、スタッフの皆さんの努力と心意気に僕は拍手を惜しみません。
　サイレント映画を作るとき、肝になる部分があります。
　サイレントの王様チャップリンは申しました。
「観客は分らなければ笑わない」
　この作品セリフはありません。
じゃあ、どうやってストーリーを分らせるのか？
　俳優達の身振り手振り、マイムの技量が重要になってきます。それは名人芸的なものが要求される訳です。
また分りやすい場面の設定。
そして最も大切なのは、カットとカットを繋ぐ編集です。
　かつてスティーヴン・スピルバーグ監督があるインタビューで語っていました。
「編集がうまくつながっているかどうか、確認する方法があるんだ。それはね”録音した音を消す”んだよ。それでストーリーが分るんだったらいい編集だよ」
　何の事はない。
つまり一旦「サイレント映画に戻ってみろ」と言っている訳です。それが基本なのです。
もう全く、そこらへんが分ってないカントクが多すぎるのね。観客に分るように映画を作る。それは基本中の基本です。
　さて、物語は１９２０年代後半。主人公のジョージはサイレント映画の大スター。
人気、名声、地位、お金、全てを手に入れています。正に「我が世の春」みたいな生活です。しかし絶頂期の彼に突然現れたのがトーキーという代物でした。映画のセカイにひとつの革命が起きたのです。スクリーンに映っている役者の声が聞ける！　音が出る！！

　そんな折、彼は一人の女性と出会います。名前はペピー。映画スタジオに足繁く通い、何とかエキストラに使ってもらおうとオーディションなんかに応募しまくっている、ペーペーの駆け出し女優です。彼女はこのサイレントからトーキーへという映画界の流れにうまく乗りました。
どん欲なまでの意欲と向上心で、スターの階段をみるみる駆け上がっていきます。
対照的にジョージの人気は急降下。やがて人々から忘れ去られ、淋しい過去の人としての生活が始まります。人気商売というものの恐ろしさ、一般大衆の移り気な心の残酷さが、まざまざと映し出されます。やがて絶望した彼は、自ら命を絶とうとまで思い詰めるのですが……。
　人生、それぞれ浮き沈みが合って当然。ただ、高い山に登った人は、その代償として、他の人よりも深い谷底を見る宿命を背負わされる、僕はそう思います。
　高い地位に上り詰めたからこそ、転落したときのショックは計り知れないものがあります。
　僕自身、この作品のジョージ程ではありませんが、そう言う辛い経験を少しばかり味わいました。世の中から忘れられた存在として扱われる、その淋しさ、辛さ、切なさが、この作品ではよく分かる「方法論」で描かれております。
　本作の主演男優ジャン・デュジャルダン、相手役のベレニス・ベジョ。僕は全く知らない役者さんだったけど、どちらも見事な演技でした。ぴたりと息の揃ったタップダンスなんて、相当な訓練をしたのでしょう。
　それから忘れちゃいけない、この人、ジェームズ・クロムウェルさん。僕、この人大好きですねぇ。あの大傑作ブタ映画「ベイブ」での名演ぶりが印象に残ってます。今回はスターの専属運転手役でお元気な姿を見せてくれています。
　作品を通して１９２０年代から３０年代にかけての、レトロな雰囲気が一杯詰まった本作。それにはきっとキャメラ、照明、特殊効果など、裏方さん達の素晴らしい仕事があったのだとおもいます。そのスタッフを見事に束ね上げたミシェル・アザナヴィシウス監督の手腕が光ります。
まだ四本しか映画を撮った事がない人とは思えないですね。
すばらしい。ブラヴォーです。
　僕はもう一回観に行きます。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆☆
美術　☆☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　ミシェル・アザナヴィシウス
主演　　ジャン・デュジャルダン、ベレニス・ベジョ、

ジェームズ・クロムウェル

製作　　２０１１年　フランス

上映時間　１０１分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=cjDCfV1nLIk

ミッドナイト・イン・パリ

２０１２年６月５日鑑賞

＊＊＊監督、脚本、主演、それはパリだった＊＊＊

「ヨーロッパの監督はずるいよなぁ。パリを撮影してりゃぁ映画になっちゃうんだからね」
ある日本の映画監督がそんな事を言っておりました。
本作「ミッドナイト•イン•パリ」を観て、まさにその通りだと思いましたね。この作品の監督、主演、脚本、それらをやってのけたのは、実は「パリという街」そのものだったのではないか？
　という錯覚に陥るのです。
　もちろん監督•脚本は言わずと知れた鬼才、いや、もう巨匠といっていいのかな、ウディ•アレン監督です。
　キャスティングがあまりにも魅力的すぎる！
　スクリーンにマリオン•コティヤールが登場した時にはハッと息をのむ程に美しかったですよ。あの「エディット•ピアフ」での神懸かり的とも言える演技によって、彼女はその名声と地位を不動のものにしましたね。もう大女優としての品格、気品に溢れてます。
　パリの風景にマリオン•コティヤールを置いてみましょう。なんだかドラマが始まりそうですねぇ。もう映画が生まれてくる予感がしますね。そんな感じ、わかってもらえますかねぇ。
　そしてエイドリアン•ブロディ。
「戦場のピアニスト」での彼の迫真の演技、恐るべき才能、そして映画に取り組む姿勢。その誠実な仕事ぶりは、スクリーンからも伝わってくるんですね。こういういい役者さんはなかなかいない。なお、本作では、もうあり得ない、ぶっ飛んだある画家を演じています。これもお楽しみ。
　さて、ストーリーはそこそこ成功している脚本家の主人公が、婚約者とその両親を連れてパリに観光旅行にやってくる。ところが彼はある夜、不思議な体験をします。見知らぬクラシックカーに乗った男女から誘われ、行き着いたのは名士達が集まるサロン。
　でもまてよ、ここにいる人達ってどこかで聞いた事、見た事がある様な……
　そう、彼は知らぬ間に１９２０年代のパリにタイムスリップしていたのでした。
　そこではアメリカ文学の旗手、スコット•フィッツジェラルドや、アーネスト•ヘミングウェイがたむろし、モディリアーニの恋人が哀愁を帯びた表情で佇み、さらにはパブロ•ピカソが絵画について熱い口調で熱弁をふるっています。
　信じられない様なチャンスを手に入れた主人公。彼は生活のために書く脚本よりも、小説家になる事を目指していたのです。彼は書きためた自作小説の原稿を、これら文学史上に燦然と輝く著名な作家達に読んでもらおうとするのですが……
　＊＊＊やっぱりねぇ、ウディ•アレン監督、彼はパリが大好きなんですね。きっとこの作品は彼の夢の具現化でしょう。
「　ああ、もし自分が１９２０年代のパリにタイムスリップ出来たら、どんなに有益な日々を過ごせる事だろう」

「もしピカソやヘミングウェイやダリに出会えたら、自分は何を語るだろう」
　ウディ•アレン監督という人はよく自分自身を投影させて作品を作る事で知られています。
　本作でも主人公はウディ・アレン本人を感じさせます。今の自分の仕事に疑問を持ってしまっている人物。だけど外面は仕事としてある程度成功しているように見えてしまう。それゆえに、なおさら心の中は何とも空しいものがある。
　実際ウディ•アレン監督はアカデミー賞の授賞式をすっぽかした事で有名ですね。その時は確かジャズクラブで趣味のクラリネットを吹いていたんだそうですが……
　やっぱり彼は作家なんでしょうね。どうしても今の自分に満足出来ない、もっと何かあるんじゃないか、と掘り下げていってしまう。
そういう、どうしようもない作家としての性を持った人だと思います。
　だから次々と作品を作り続けては、ため息ばかりついている。そんな風に僕には見えるのです。
　本作はそういうウディ•アレン監督の作家としての深刻さや、神経症的なデリケートさは影を潜めています。テイストとしては全然重くないんです。
　むしろ軽快でカジュアルに楽しめる作品に仕上がっています。
　素敵な俳優さん達とパリを楽しむ事が出来る、パリへの愛情が感じられる逸品といえるでしょう。
　DVDが発売されたら改めて楽しんでみたいですね。美味しいフランスワインでも傾けながら。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆☆
演出　☆☆☆
美術　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　ウディ・アレン
主演　　オーウェン・ウィルソン、マリオン・コティヤール、
　　エイドリアン・ブロディ
製作　　２０１１年　スペイン／アメリカ
上映時間　９４分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=_cgX7pnR-xM

ブラス!

２０１２年９月２８日鑑賞

＊＊＊首つりピエロとトロンボーン＊＊＊

ある経済評論家がこの作品を絶賛していたので、DVDで鑑賞。
びっくりした。オープニングの絵の作り方がいい！！
いくつかのぼんやりした光の球がリズミカルに動く。そのバックに流れるブラスバンドのマーチ風の音楽。
光の球達はその音楽に合わせて楽しそうに動いている。正に光の乱舞。
ところがだ。やがてフォーカスがはっきりしてくる。
その光の球の正体は、なんと炭坑夫達のヘルメットにつけたライトだったのだ。
彼らは仕事を終え、炭坑から引き揚げてくる。皆、労働に疲れ、顔は石炭のススで真っ黒だ。
楽しそうに見えた光の球の乱舞と、疲れ切って真っ黒にすすけた男達の顔。その見事な対比。
この監督、素晴らしい映像センスの持ち主だと感心した。
舞台はイギリスのヨークシャー地方にある炭坑だ。
彼ら炭坑夫達はクラブ活動でブラスバンドを結成していた。
歴史のあるブラスバンドである。
この作品で初めて知ったが、イギリスには各地に、こういった地域毎の社会人ブラスバンドが存在するらしい。
ブラスバンドのコンテストもあり、地方大会を勝ち抜けば、決勝戦は有名なロイヤルアルバートホールである。ここは、イギリスに於いてはクラシック音楽の聖地でもある。
　余談だが、ぼくは、このロイヤルアルバートホールで行われた、小澤征爾率いるサイトウキネンオーケストラが演奏した「ブラームスの交響曲第一番」が忘れられない。世紀の名演奏だったと僕は思う。
　さて、この炭坑町のブラスバンド部員達。実は、もうブラスバンドなんぞやっている場合ではなくなっていた。炭坑の閉鎖が会社から予告されていたのだ。
　このあたりは、サッチャー政権時代のイギリスの事情を予習しておいた方が、この映画を理解しやすいと思う。
　この作品、とにかく良く出来た作品なのだが、特に俳優達がいいと思った。ほとんどが舞台出身の俳優達である。
ブラスバンド部の指揮者役。頑固そのもの。まるで「星一徹」を思わせるオヤジ指揮者。頬骨がガシッと出ていて、その顔を見ただけで、ああ、これは相当な堅物だと分ってしまう。ちゃぶ台返しぐらいやりかねない。
その息子も同じバンドでトロンボーンを吹いている。息子はもう、ブラスバンドをやっている場合ではない事をよく分かっていた。彼には嫁さんと子供がいる。家のローンも重くのしかかる。生活の足しにと思って、彼はアルバイトを始める。それが何と子供相手のピエロなのだ。
　彼の奥さんはやがて、「こんな甲斐性なしの旦那とは暮らせない」と子供を連れて、さっさと

出て行ってしまう。借金も返せず、家も家財道具も差し押さえられてしまう、哀れなピエロ。
けばけばしい道化の化粧と対照的な、惨めで、哀れで、悲嘆にくれるピエロの心情、表情。
監督の見事な演出に胸を打たれる。
　さびれ行く炭坑町を描くという事では、邦画の傑作「フラガール」があるし、ブラスバンドを描くという事ではこれも傑作「スウィングガールズ」がある。
この二作品は、俳優自身が猛特訓してフラダンスを踊り、ビッグバンドジャズを演奏する。全くの初心者が徐々にうまくなってゆくという過程があって、最後に見事な踊りと演奏を披露してくれる。決して「吹き替え」を使わない、役者自身が頑張ったんだと言う、その本物感が観客に熱い感動を与えてくれる作品である。
　それに対して本作「ブラス」に登場する部員達は、すでにある程度の技量を備えている、という設定になっている。
ゼロからブラスバンドを育てていくと言う成長物語ではないのだ。
実はこの作品、社会派の方向に軸足を置いた作品なのだ。
　ブラスバンド部はやがて地区コンテストを勝ち進み、念願のロイヤルアルバートホールのステージで決勝を迎える。
　病をおして病院から駆けつける指揮者の頑固オヤジ。
彼はこの決勝戦でスピーチを行う。それは当時のイギリス、サッチャー政権への「断固としたNO」を突きつけたスピーチなのである。
このスピーチには正直、鳥肌が立った。
　あのチャップリンの「独裁者」でのエンディング。有名な演説。あれに匹敵する様な感動を与えてくれる。このスピーチに「ブラス」という作品の本質がすべて凝縮されていると言って過言ではないだろう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
美術　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　マーク・ハーマン
主演　　ピート・ポスルスウェイト、ユアン・マクレガー
製作　　１９９６年
上映時間　１０７分

ごめんなさい、この作品の予告編映像が見つかりませんでした。

２０１２年9月２９日鑑賞

＊＊＊ジェントルマン諸君！！フェアプレーだ＊＊＊

観終わった後、爽やかな風が心の中を吹き抜けてゆく、そんな後味のいいスッキリとした作品でした。

時代は１８７４年、当時のドイツは初めて英語教育を導入しようとしていました。そこで国は優秀な若者を英国に留学させます。その一人がコンラート・コッホ。

彼は「これからドイツという国の英語教育を開拓するのだ」と大変な熱意を持ってイギリスから帰ってきます。着任した学校で生徒に英語の発音を教えるコッホ先生。

「tとhの発音に気を付けて」等と、本場仕込みの英語を生徒達に仕込んでゆきます。いわゆる「オックスブリッジ」というやつでしょうね。

コッホ先生には、英語の他にもうひとつ英国から持ち帰ったものがありました。それがフットボール、サッカーです。

ドイツのサッカーの歴史は、彼が持ち込んだ、たったひとつのサッカーボールから始まったのです。

この作品、当時のドイツの教育事情などが垣間見えて興味深いです。学校が教える全ての科目に共通するのは「服従」と「規律」。教師は教壇で常にムチを片手に持っているし、いう事を聞かない生徒にはすぐ体罰。生徒達はまるで軍隊のように厳しく管理されています。

すべては「ドイツ帝国」のために尽くす人間になるように。現代人の私たちから見ればそれは半ば洗脳教育に近いように感じます。

また、当時のドイツには激しい貧富の差があった事もこの映画で見て取れます。労働者階級の子供になんぞ、高等教育など必要ない、と思っている上流階級からの上から目線のいやらしさ。その大人達の意識は、当然子供に伝染します。上流階級の子供は当たり前のように労働者階級の子供を偏見の目で見、いじめや嫌がらせをします。

そう言うドイツの教育事情の中に、新進気鋭の英語教師コッホ先生が放り込まれた訳です。そんな状況の中で彼は、全く新しい英国式のスポーツと文化を持ち込もうとします。

子供って言うのは正直ですね。面白いもの、楽しいものに国境はありません。コッホ先生が教えてくれたサッカーに、生徒達はすぐ夢中になるのです。

当時ドイツがイギリス人の事を「野蛮人」と呼んでいたのにはビックリ。野蛮な国の野蛮なスポーツ、サッカーというわけです。

このスポーツを教えようとするコッホ先生に対し、古い体質の学校や体制側は激しく「弾圧」します。

「学校の中でサッカーはまかりならん！」

サッカーを禁止されたコッホ先生と生徒達は、ならば放課後に学校の外で、こっそりサッカーをやろうと一計を案じるのですが……。

この作品が爽やかなのは、ひとえにコッホ先生が生徒達に、これだけは伝えたい、という熱意

があるからだと思います。しかも芯がぶれない。
　彼が伝えたい事はこの作品を見る僕ら観客へのメッセージでもあります。
　コッホ先生がどうしても伝えたかったこと。それが、
「フェアプレー」です。
　何事にも「フェアであれ！」というのは、やがて少年達に、貧富の差もスポーツなら関係ない、乗り越えられるんだ、という希望を与えてゆきます。
　コッホ先生が生徒達に語りかける時、必ず言うコトバが印象的です。それは「ジェントルマン！！（諸君）」です。
（ちなみに「少年よ大志を抱け！」という言葉を残したクラーク博士は学生達を”ボーイズ”と呼んだのですね。”ジェントルマン”じゃないのです。この辺の上から目線の感覚、おもしろいですね）
　コッホ先生は上下関係を嫌います。お互いがお互いを尊敬し合う。それが「フェアな精神」である事を、子供たち相手に教えたのです。
「諸君！！フェアプレーだ」と少年達にサッカーを伝えたコッホ先生の先進性、人間としての誇り、精神の気高さがとてもさわやかな作品でした。
　それにしても、こんな先生達がもっと多くいてくれたら、後にドイツはあんな愚かで悲劇的な戦争を起こさなかったでしょうに。それが何とも悔やまれますね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆☆
美術　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　セバスチャン・グロブラー
主演　　ダニエル・ブリュール、ブルクハルト・ラウスナー
製作　　２０１１年　ドイツ
上映時間　１１４分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=wv3h7_kOPGg

メリエスの素晴らしき映画魔術

２０１2年１１月３日鑑賞

＊＊＊あなたは映画の歴史を目撃する＊＊＊

ジョルジュ・メリエスという人は、人類史上初めて、世界的大ヒット映画を創った人とされている。
ご承知の通り、映画はリュミエール兄弟が発明した。
当時の人々はその「動く写真」の臨場感にビックリ仰天したのである。まあ、現代で言えば、あの3D傑作映画「アバター」以上の驚きだったのだろう。
そして、当時の人はこの「動く写真」が見せ物興行として成功すると踏んだ。
そう、まだ映画は、アートでも、一流のエンターテイメントでもなく、それこそ遊園地のお化け屋敷のような「単なる見せ物」だったのだ。
それを「映画作品」と呼べるものにまでレベルを引き揚げたのがメリエスという人である。
このドキュメンタリーは奇術師でもあったメリエスの人柄や、再発見されたメリエスの「月世界旅行」の復元の様子が克明に記録されている。
　僕が印象に残ったのは、メリエスの作品には、すでに丁寧な舞台装置や装飾がなされていた事だ。それらのデザインもメリエス自身がアイデアを練ったものらしい。
当時まだ、映画の脚本は存在しなかったようだが、それでもメリエスは、映画の演出、構成、美術、衣装デザインまで、一人何役もこなしたのである。
　また、メリエスは世界初の映画スタジオまで建ててしまった。更には１００人を超える従業員を雇ったのである。なぜ、そんなにたくさんの従業員を雇ったのか？　それは映画フィルムの一コマ一コマに彩色を施すためだった。
そう、なんとメリエスは百年以上前に、世界初の「カラー映画」を創っていたのである。
　そんな彼の彩色済みのフィルムが偶然にも発見された。
　映画のフィルムは湿気などを嫌う。それが１００年も経っていると、ほとんどはフィルム同士が溶けたロウソクのようになりくっついてしまう。幸いにもメリエスのフィルムはそこまで損傷はひどくなかった。丹念な修復作業の結果、１００年前の色彩が２１世紀の現代に見事に蘇ったのである。
メリエス個人は、映画で大成功を収めた。映画業界の会長職なども歴任したようだ。
しかし、大衆の心は移ろいやすい。
彼の後からどんどん優れた映画作家が生まれた。
グリフィス、エイゼンシュテイン、そしてチャップリン。
まさに映画はひとつの芸術というジャンルを確立してゆく。
そんななか、メリエスの映画はまだ「見世物」の感覚が残っていた。既に時代に取り残されようとしていた。
やがて映画に大革命が起きる。
「トーキー」である。映画に音が付いたのだ。

その大きな時代の波を乗り越えられたのは、チャップリンの様な一握りの天才だけだった。
さすがのメリエスもこの時代の波にはひとたまりもなかった。
やがてメリエスは没落し、破産する。
晩年は子供相手に小さなオモチャ屋を営んで余生を送った。
このあたりはメリエスへのオマージュをこめて、マーティン・スコッセッシ監督がつくった「ヒューゴの不思議な発明」に詳しく描かれている。
人の世の無常を絵に描いた様な人生を送った、ジョルジュ・メリエス。彼が生きた時代の実写映像が、ふんだんに盛り込まれたこのドキュメンタリー作品。他にも、メリエスに敬愛の念をこめて、あのトム・ハンクスや「アメリ」のジャン＝ピエール・ジュネ監督等がインタビューに応えている。
２０世紀は正にリュミエール兄弟や、メリエス達の映像によって時代の幕が開いた。そこから百年経った２１世紀。僕たちはメリエスの偉業を、その時代をスクリーンで目撃する事が出来る。
あと１００年先。２２世紀の人々は、いったい何を観ている事だろう？　そんな思いがふとよぎる。
そして僕たちは問いかける。
１００年先まで残る映画作品は今、生まれているのだろうか？
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
美術　☆☆☆☆☆
音楽　☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　セルジュ・ブロンベルグ、エリック・ランジュ
主演　　トム・ハンクス、ジャン＝ピエール・ジュネ
製作　　２０１１年
上映時間　６３分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=yGjZWonMU0M

最強のふたり

２０１２年１１月１１日鑑賞

＊＊＊友情はマネーを超えられるか＊＊＊

前評判の高かった本作。かなり期待して観に行った。導入から前半部分、どうにも映画のリズムがいまいち悪いなぁ、どうしたことだろう？　と首を捻りながら見ていたのだが……。
ところが中盤以降、正に評判通りの面白さが、ぐんぐん加速してゆくではないか。こりゃ、おもしろい！
ストーリーはテンポよく進むし、キャメラが撮る絵も最高！！
エンディングのロングショットの素晴らしい事！
気がつけば、あっという間にエンドロールが流れていた。
もっと観たいなぁ〜、楽しいなぁ〜、と率直に感じた。
前半と後半ではまったく別物の映画のようだ。
本作は現在進行形のフランスでの実話である。
事故で首から下が麻痺してしまった大富豪。
彼の身の回りの世話をするヘルパーが募集された。集まって来た人達は身体障害者への理解もあり、専門のキャリアも重ねて来た連中ばかり。ところがその中に黒人の青年ドリスがいた。
　彼は失業中。スラム街の出身者。
他の面接に２回落ちて今回が３回目。
僕は初めて知ったのだが、フランスでは求職期間中に面接を受けて３回落っこちると失業手当がもらえるのだと言う。
ドリスは失業手当が早く欲しかった。だから絶対受かるはずのない、大富豪のヘルパーの面接にやって来たのだ。
面接官に対してまったくやる気を見せないドリス。
「早くオレを落してくれよ。失業手当もらうんだからyo」なんてふざけた対応をする。それを見ていた大富豪のフィリップ。
彼は何か面白いペットを見つけた様な気分になったのだろう。何か愉快なことが起こるかもしれないと、試用期間つきでドリスを雇う事にした。
大富豪であるフィリップは、自分が思う事は全て意のままに出来る。それこそ移動したいと思えば、ジェット機を丸ごと一機チャーターすることなんて簡単に出来る。スーパーカーなんて腐る程持っている。
秘書や取り巻きの弁護士もアゴひとつで動かせる。
この世の中で自分の思い通りにならないものなどない。
そう、自分の首から下を除いては。
そんな彼にとって、優秀なヘルパーを集める事なんていつでも出来る事だ。
一般常識で凝り固まった人間に、大富豪フィリップは、もう、うんざりしていたのだ。彼に慇懃に接してくる人達は、結局フィリップの持つ資産、「マネー」にたいして頭を下げているのだ。

彼にはそれがよく分かっていた。
だから淋しかった。
ただ金を持て余して生きる事が空しかった。
「資産家」というのは実はとても孤独であり、資産を守るために細心の注意を払わねばならない。気苦労の多い身の上なのだという事が分る。
そんな彼にとって黒人青年ドリスは予測不可能な事をしでかす、珍しいペットであり、気晴らしの道具にいいと思われたのだ。
一方黒人青年ドリスにとっては、まさかの幸運が転がり込んで来た。
スラム街の貧しさ。
ケンカの絶えない家族。
狭い部屋。そこから一転、大富豪の邸宅の一室を与えられたのだ。
「君の自由に使っていい」
ふかふかのベッドにひっくり返り大喜びのドリス。室内は格調高いロココ調のインテリア。大仰な額縁にはめ込まれた、歴史を感じる人物画がドリスを睨む。それを尻目にドリスは金ぴかの飾りの付いたバスタブで風呂に入りご満悦である。
大富豪フィリップとスラム街出身のドリスでは、美的感覚も当然違う。
二人は高級な画商のギャラリーを訪ねる。
フィリップは現代アートに造詣が深い。
「いい絵画だ」とフィリップ。
「マジで？！　こんなのただの赤いインクの染みだぜ！」
その馬鹿げた絵に何百万円も払って買い求めるフィリップ。
音楽の趣味も違う二人は、ある日オペラを観に行く。
「おい、あれなんだよ？　木のつもりかよ？　笑わせるぜ！　木が歌ってらぁ。ところでこれ何時間やるんだい？」
「四時間だ」
「まじ？！　馬鹿げてる！！」
まあ、こんな具合で、この凸凹コンビのやり取りは、愉快な漫才のようだ。実際、フィリップにとってみれば、ドリスの率直でウソ偽りのない性格と感性が、実に新鮮で楽しかったのだ。
彼は大富豪である。いったん社会に出れば彼の資産を誰が狙っているのか分かったものではない。彼は常に緊張を強いられる。
そんなフィリップをリラックスさせてくれる、楽しませてくれるのがドリスという存在なのだ。
やがてフィリップとドリスには、障害者とヘルパー、大富豪とスラム街の青年、と言う枠を超えた友情が生まれ始める。
この作品、パラグライダーでの滑空シーンなど映像を観る楽しみはもちろん、なによりヒューマンドラマとしての味わいも豊かで、観終わった後の爽やかな味わいが抜群だ。
今年観た洋画の中でも間違いなくベスト３に入る秀作。観て損はない。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆☆

配役　☆☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

美術　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　エリック・トレダノ、オリヴィエ・ナカシュ

主演　　フランソワ・クリュゼ、オマール・シー

製作　　２０１１年

上映時間　１１３分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=lfHOM7dPzZA

ソハの地下水道

２０１２年１１月１２日鑑賞

＊＊＊希望の光をたぐり寄せた人々＊＊＊

僕はまず何よりも、この邦題「ソハの地下水道」というタイトルをつけた日本人スタッフ達に拍手を送りたいと思う。
原題は「IN DARKNESS」
これではインパクトがない。それに邦題の「地下水道」という表現がよかった。これを単に「下水道」にしてしまったら、おそらく誰もこの映画を観に来なかっただろう。
この映画は第二次大戦下のポーランドで、下水道の管理人が地下水道にユダヤ人をかくまった、実話を元にしたストーリーである。
　ドイツ軍の迫害から逃れるために、ユダヤ人達のあるグループが、下水道の中で生活する事になった。ねずみはいたるところにチョロチョロするし、汚い物が一杯流れてくる。時には殺されたユダヤ人の死体まで流れてくるのだ。この暗くて臭い、息の詰まりそうな空間と雰囲気を、監督はしっかりと映像で捉えている。しかし観客としては金を払って、こんな汚い臭い物が映る映画を長く観ていたいとは思わない訳だ。そこのところ、この監督、実に観客の心理を理解しているのである。
　地上の世界と地下水道の世界の配分が絶妙なのだ。
ユダヤ人を救う映画、それから地下水道を使う映画。
これって「シンドラーのリスト」と「第三の男」を足して二で割った様な映画か？と思うのだが、確かにその偉大な二つの作品への敬意を払っている事は画面から見て取れる。
　しかしそれ以上にこの脚本は実話をベースに描かれる人間のドラマがよい。
　ユダヤ人、ポーランド人、その市井の人々が、いかに戦争に巻き込まれて行ったか？　自分の身辺に危機が及んだ時、人間としてどういう行動をとったか？　それが市民の目線で見事に描かれている。
　ポーランド人のソハは、最初ユダヤ人のグループを見つけた時、決して善意で助けた訳ではなかった。金目当てだった。あくまでユダヤ人との取引という、いわばビジネスライクに彼らと関わった訳である。しかしソハは、やがて人間として、どうしても彼らを見捨てておけなくなる。
危うく見つかりそうになると、彼らユダヤ人グループを別の地下水道に移動させる。ソハにとっては地下水道は自分の庭の様な物。迷路のように入り組んだ地下水道の、ここなら見つからないだろうという場所にユダヤの人達を匿ってゆく。
　ユダヤ人グループの中に子供が二人いる。
そのうちの一人の女の子。
この子の演技はすごかった。
僕は個人的にこの子役さんに最優秀助演女優賞を差し上げたいと思った。
　この女の子、地下水道の生活に徐々に慣れてゆく。やはり子供は順応力が高い。歌を唄って皆

を和ませたり、邪魔なねずみは平気な顔で、素手で捕まえ向こう側へ押しやったりする。その演技の枠を超えた「何気なさ」にビックリしてしまうのだ。
地上はドイツ軍がいて危ない危ない世界。
でもそこでは光がある。
地下の暗闇の世界からソハに連れられ、マンホールからそっと地上の世界を覗き見る少女。印象的なシーンだった。
そして解放されたときの彼らの喜び。
地上の世界、光の世界へ出られる事の、この上ない開放感。
観客もまるで自分の事のように救われる気分になる。
本作は音楽の使い方が、これまた抜群にうまい。
ユダヤ人の収容所がある。ユダヤ人達が楽団をつくって演奏している。その前には武器を持ったドイツ軍が並ぶ。
そこで行われているのは、これから収容するユダヤ人達の選別だ。
働ける者は収容所へ、年寄りや子供は即刻ガス室送り。
それこそ将校の指先ひとつで人間の運命が決まってゆく。
そこで流れている音楽。
なんと「美しく青きドナウ」なのである。
なんと言う残酷な音楽の使い方か。
ヒトラーとドイツ軍は音楽も占領しようとしたのである。
この作品では他にも印象的な音楽の使われ方がなされている。悲劇的な場面で明るい曲調の音楽が流れて、更に悲劇性を増幅させるという絶妙の効果を上げている。
全く何とうまい映画音楽の使い方だろうと感心していたら、なんのことはない。
あの「敬愛なるベートーベン」を撮った監督さんだったのだ。僕はあの映画をスクリーンで観た。第九初演のシーンの痺れる様な快感、高揚感が今だに忘れられない。優れた音楽映画であった。更にすごいと思ったのは、お恥ずかしながら初めて知ったが、アグニェシュカ・ホランド監督が女流監督であった事だ。実に力強いタッチで、堂々とポーランドの歴史に真正面から向かい合った本作。あっぱれ、お見事と申し上げたい。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
美術　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ

監督　　アグニェシュカ・ホランド
主演　　ロベルト・ヴィエツキーヴィッチ、
　　ベンノ・フユルマン
製作　　２０１１年　ポーランド、ドイツ、
上映時間　１４３分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=e7vYB13HnWI

エレニの旅

２０１２年１１月１３日鑑賞

＊＊＊キャメラが描く「避難」という風景＊＊＊

今年、不慮の事故で亡くなられたアンゲロプロス監督を追悼して神戸の元町映画館で上映会がありました。
以前から観たいと思っていたアンゲロプロス監督作品をようやくスクリーンで観る事が出来ました。
　主人公エレニという少女は、ロシア革命で逃れて来た難民です。逃げる途中で父母とも生き別れになってしまう。一緒に国境をわたってギリシャに避難して来たロシア人の一団。その一人の男性に彼女は引き取られます。
やがてエレニは成長し二人の子供をもうけました。しかし、その子は養子に出されてしまいます。更には引き取られた養父との結婚をエレニは迫られる。エレニは心を寄せる義兄、つまりは養父の実の息子と共に家を逃げ出します。
その頃ギリシャではファシズムの嵐が吹き荒れていました。世の中は混乱し、多くの難民が出ました。その人達は使われなくなった劇場を仮の住処としていました。エレニ達は親切な楽師の世話で、劇場に避難します。しかし、義父はエレニを追って劇場をみつけだします。
エレニと義兄の果てしない「避難」の旅が続いてゆくのです……。
僕はこの作品を観ていて、２０世紀の偉大な宗教画家、ルオーの「避難」という絵画を思い出しました。世の中で一番弱い人々は戦乱の中、常に避難し続けなければならないのです。
ということで、このお話、一人の女性、ひとつの家族を通して描く、近現代ギリシャの一大叙事詩といえる、壮大なスケールのあるお話なんですね。
ただ、僕が思うに、アンゲロプロス監督作品はどれもストーリーを追いかける、あるいはストーリーを楽しむという性格の作品ではない訳です。
　アンゲロプロス監督の映像の特徴である、ワンシーン、ワンカットの長回し。ひとつの村を丸ごとスクリーンに写し取る様なスケール感。
　これはまさに、映画でなければ実現出来ない表現な訳ですね。そう言った映像美を鑑賞する、というのがアンゲロプロス作品の楽しみ方だと思います。
いくつかのシーンで、ほんとうにハッと息をのむ様な美しさを味わう事が出来ます。
特にエレニの義父の葬儀のシーンは圧巻でしょう。
水辺に浮かぶイカダ。そこには義父の棺が載せられています。棺を取り巻くように同じ筏に乗ったエレニ、義兄、親族達。
そのイカダの後ろから続く、黒い旗をたなびかせた船の葬列。
反射する水辺からのまばゆい光。
対照的に船に整然と並べられた漆黒の旗。
よく、こんなシーンが撮れたものだと感心してしまいます。
映画にストーリー的な分りやすさというものを、あえて、一切求めない。

アンゲロプロス監督はスクリーンにキャメラを使って丹念に丹念に、一筆一筆、描いてゆきます。それは正に動く風景画の様です。そして、何より僕を惹き付けたのが、その音楽の素晴らしさです。壮大なスケールで描かれる動く風景画をその美しい音楽で楽しむ。母国ギリシャの歴史に向きあった、アンゲロプロス監督。その作品のメッセージ性、芸術性は、もちろん高く評価されるところです。

　ただ、ぼくはアンゲロプロス監督の映像の感覚と音楽センスもまた、大きな魅力のひとつだと思うのです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆☆

美術　☆☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　テオ・アンゲロプロス

主演　　アレクサンドラ・アイディニ、
　　ニコス・プルサディニス

製作　　２００４年　フランス、ギリシャ、イタリア

上映時間　１７０分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=hRxc77-Cqxw

２０１２年１１月１４日鑑賞

＊＊＊音楽と映像、まさに現代アート＊＊＊

この「永遠と一日」も神戸の元町映画館で、「アンゲロプロス監督追悼特集」のひとつとして鑑賞してきました。

　映画ファン、映画マニアにとって、アンゲロプロス監督作品を観るというのは、自分の鑑賞眼を鍛えるための鍛錬の場でもあるようにおもいます。映画を愛する者の嗜みのひとつと言ってもいいかもしれません。

　ストーリーを簡単に述べる事は極めて難しい内容の映画です。詩人の主人公と、少年の交流を描いたと言えばいいでしょうか。

アンゲロプロス監督作品はだいたいどの作品も、ストーリーを追いかけてゆくタイプの作品ではない訳です。映画のセオリーとして、「そのストーリーは一行で言い表せるものでなければならない」と言う、お約束事があります。

例えばスティーブン・スピルバーグ監督の「ジョーズ」は「サメに襲われる映画」です。黒澤明監督の「七人の侍」は「侍が百姓を守る話し」です。どれも至ってシンプルなんですね。

ところがアンゲロプロス監督は、そのお約束事である、「一行で言い表せる映画」は敢えてつくらないと言う、決意の様なものを感じます。

本作「永遠と一日」はその特徴がとても良く出た作品です。特に映像美と抽象性が実に絶妙な融合を見せております。

ただし、この作品は単なる難解で抽象的な作品では決してありません。むしろその抽象表現が大変分りやすく、アンゲロプロス監督が何を表現したかったのか、その意図がよく分かる表現方法になっています。

日本の昔の絵画、絵巻物などに、同じ場面で違う時間表現を使う「異時同図法」というのがありますが、アンゲロプロス監督は何と、その日本の絵画技法を映画に取り入れているんですね。

　主人公の詩人が回想する場面で、過去の人物を登場させ、セリフさえ喋らせています。

なにより、キャメラワークが見事ですねぇ。

キャメラは海の向こう、遠景を映しています。やがて徐々にキャメラは後ろに下がり、引きの絵になってゆきます。今まではキャメラの後ろにあって見えなかった、岸壁が見えてきます。壊れた古い遺跡が見えてきます。キャメラは更に後ろに下がります。すると今度はその遺跡のホールにいる人物が映し出されます。その人物もキャメラの引きにあわせて演技をしている訳です。

　こんな芸当はそうそう出来るもんじゃありません。入念なリハーサルを繰り返し、カメラの移動と役者の動きがピタリと一致するまで妥協しない。そう言うワンシーン、ワンカットの絵のスケール感。それを何気なく、実に自然に観せてしまうところがアンゲロプロス流なのでしょうね。

　そして、忘れてはならないのがこの音楽の素晴らしさ。

なんと言う哀愁溢れるメロディー、才能豊かな作曲家をつかってますね。チャップリンの「ライ

ムライト」、アランドロン主演の「冒険者達」それに勝るとも劣らない見事な音楽と映像の融合です。映画を美術作品として鑑賞するにふさわしい、現代アートと呼べる映画作品だと思います。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆

配役　☆☆☆

演出　☆☆☆☆☆

美術　☆☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　テオ・アンゲロプロス

主演　　ブルーノ・ガンツ、イザベル・ルノー

製作　　１９９８年　ギリシャ、フランス、イタリア

上映時間　１３４分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=jdP7yYNt90U&feature=related

砂漠でサーモン・フィッシング

２０１２年１２月２９日鑑賞

＊＊＊サケよ、夢の河を泳げ＊＊＊

イエメンの大富豪が言い出した。
「この砂漠でサーモンが釣りたい」
何しろ大金持ちだからダムまで作っちゃった。
「金」と「物」はすでにある。
あと欲しいのは「ひと、人材」だけ。
そこでサケに詳しい水産学者のジョーンズ博士（ユアン・マクレガー）にお声がかかった。このプロジェクトを取り仕切るのがイギリスの投資顧問コンサルタント会社。
正直僕はコンサルタント会社なんて、全く信用出来ないタチなんだけど、この映画を見てると、その役割は、「人」と「物」と「お金」の出会いを作ることなんですねぇ。
そのコンサルタント会社で「砂漠でサケ釣りがした～いプロジェクト」を任されたのが才色兼備のやり手キャリアウーマン、ハリエット（エミリー•ブラント）
まさに知的エリートって感じの人ですねぇ。だけどこの人行動力も抜群。渋る水産学者ジョーンズの首根っこを捕まえるようにして、大富豪の大邸宅へ、ヘリコプターでヒョイと、ひとっ飛び。
「こんなプロジェクトはありえません。不可能です」と、当初は言い切っていたジョーンズ博士。でも現地に行って詳しく調査していくうちに
「まぁ、理論上は可能ですね。あくまで理論上はね」と、渋々プロジェクトに参加します。さて、大富豪の夢は叶うのか？　砂漠でサケは釣れるのか？　というお話です。
でね、僕がこのお話、とてもいいなと思ったのは、大富豪のお人柄なんです。見た感じ、まだ若い資産家です。でも、大金持ちにありがちな、いやなところが全然ないんです。真面目でとても誠実。全然ワガママじゃない。
そもそも砂漠で釣りがしたいというのは、実は世間の注目を集めるためのキャッチフレーズだったんですね。大富豪はそれを利用したんです。本当の彼の希望はこの国に農業を根付かせること。そのために水が必要であり、そのためのダム建設であった訳です。大富豪は未来の世代のためにこの国に農業を残そうとしていたのです。
ただ、彼の願いを理解しない人達もいる。それも国内にです。砂漠の民はあくまで砂漠の文化や生活様式を守るべきだと言う超保守派、過激な右翼。ラッセ•ハルストレム監督は、そう言ったイエメンの国内情勢や、このプロジェクトに関わる英国政府の政治家たちの思惑等もからませながら、理想と夢を追い続ける人達を描いてゆきます。
地球上の貴重な資源「水」
その生命の源を躍動感溢れる表情でキャメラに映しとってゆきます。
そして遡上するサーモンの力強い生命力のすばらしさ。
考えてみれば映画作品をひとつ作ると言う事も、とんでもない労力がかかる訳ですね。リスクも

大きい。そんな困難を乗り越えて作品として完成させる喜び。ラッセ•ハルストレム監督はそういった、プロジェクトをやり遂げる事の喜びを、この作品で描いたのだと思います。
知的なイメージの役柄がよく似合うユアン•マクレガーのファンにはお勧めの作品です。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
美術　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　ラッセ・ハルストレム
主演　　ユアン・マクレガー、エミリー・ブラント
製作　　２０１１年
上映時間　１０８分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=HK5x_Q1pi3Q

２０１２年１月１日鑑賞

＊＊＊　山本長官とリボンの少女　　＊＊＊

この作品を退屈だとおっしゃる方もいるでしょうね。

　実は僕も途中で眠くなりました。

　しかし映画を見ている最中に「まてよ！？」と思ったのです。

　大日本帝国海軍の象徴ともいえる戦艦大和。その世界最大の４６cm砲を、山本五十六さんは、はたしてブっ放したかったのでしょうか？

　あるいは、当時最先端の性能を誇った零戦の、華麗な空中戦を見たかったのでしょうか？

　いいえ。そんな事は一切望んでいなかったのです。

　この作品はやろうと思えば、派手な戦闘シーンのドンパチに主眼を置いた作り方も出来たはずです。

　しかしです。

あえてそう言った戦闘シーンは極力控えられています。あったとしてもニッポン側がそれこそコテンパンに叩きのめされるシーンをわざわざ撮っているのです。

　山本五十六さんはどうしても戦争をしたくなかった軍人です。

　「百年兵を養うは平和の為なり」

という言葉を実践しようとした人です。

　その人が止む終えず、戦いの火ぶたを切らねばならない立場に置かれてしまった。

さぞ無念でしたでしょう。

　この作品では山本長官の人間的な魅力もよく描かれております。特に、しるこ屋の少女へ、リボンを贈るシーンは最高でした。涙が出そうになりました。

　甘いものがお好きだったんですね、山本さんという人は。郷里の水まんじゅうを美味しそうに食べるシーンがありますが、これもよかった。

　山本さんと対照的に、戦争をしたかった人達がいます。

そう「人達」

複数形です。

　まずは軍の大本営、そして何より恐ろしいのは、当のニッポン国民自身の多くが戦さを望んでいたという状況です。

　それに眼をつけたのが当時の新聞。

　「戦争をしよう！！」と言う大キャンペーンを張ればどんどん部数が伸びる。新聞社は儲かる。そう言う図式です。

　なぜ日本人は戦争を選んでしまったのでしょうか？

　余談になりますが、司馬遼太郎さんはそれを解き明かそうとしていた作家でした。

　ベストセラーの「坂の上の雲」については、生前その映像化を硬く禁じていました。それは戦争賛美につながってしまうという恐れを抱いていたからです。

　そんな司馬さんが亡くなると、先頃「坂の上の雲」がNHKで映像化されました。詳しいいきさつは僕は知ってはいません。
　映画「山本五十六」と「坂の上の雲」
この二つの作品に実は共通のセリフがあるのです。
　「始めた戦さは終わらせなければならない」
　山本五十六という人は、冷静にそれを睨んで講和に持ち込もうとしていました。しかし志の半ばで戦死されました。若くして戦場に散っていった兵士達の後を追うようにです。本当に無念だった事でしょう。
　その後の日本の戦争の様子はもう誰もがご存知でしょう。
　まるで舵を失った船のように日本の軍部は迷走し、戦争に突き進み、そして何もかも破滅させてしまったのです。
　この作品は地味な作品です。しかしその地味で平和な日常こそかけがえのないもの。
山本五十六という人は平和の大切さをよく分かっていた「軍人」だと思います。
　もし、山本長官がこの作品をご覧になったら喜んだんじゃないかと僕は思います。
　実際の自分のありのままを描いてくれたという事にです。
もしかするとこんな注文をつけたかもしれません。
「おい、オレの『モナコで博打打ちになる』という夢のシーンがないじゃないか」
きっと朴訥でほっこりとした笑顔で、そんな事を話してくれるんじゃないでしょうか。そう思わせてくれる丁寧な作りの作品でした。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆
演出　☆☆☆☆
美術　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　成島出
主演　　役所広司、玉木宏、柄本明
製作　　２０１１年　日本
上映時間　１４１分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=pG1ogKV70-E&feature

「けいおん！」

２０１２年１月２日鑑賞

＊＊＊ふれたよ！　放課後の天使達に！＊＊＊

「けいおん！」は映画になってもやっぱり「けいおん！」でした。

唯はのほほ～んとしていて、どっかポイントボケてるし、澪はビビりで恥ずかしがり屋さんのまんまだし、律ちゃんはギャグもエネルギー全開だし、個人的に僕の一推し、ムギちゃんはいつものふわふわシンデレラお嬢様だし、それにツインポニーテールのあずにゃんはしっかり者です。

この五人のバンド「放課後ティータイム」は映画に登場してもやっぱりテレビ版のまんまのノリでした。

それでいいんだと思います。テレビシリーズのファンもそれを望んでいた訳だし、今回の劇場版「けいおん！」では彼女達が卒業旅行でロンドンへ旅立ちます。

相変わらず京都アニメーションが描く、徹底したリアリズム溢れる情景描写はさすがですね。

劇場のいい音響で「放課後ティータイム」の楽曲が大音量で聞ける、体験出来る。まさにライブみたいなノリでファンにとってはもう最高です。テレビシリーズ をご覧になった方なら、今回の劇場版の中で数々の仕掛けられた伏線、ジグゾーパズルのようにテレビシリーズと絡み合い、組み合わさって行く、その面白みを 実感出来ると思います。

逆にテレビシリーズを見ていないし、特に「けいおん！」ファンでもない方にはちょっとこのマッタリ感はきついかもしれない。

でもこれが彼女達五人が本来もっている雰囲気なのです。このマッタリ感、フワフワ感があってこその「放課後ティータイム」なのです。

かけがえのない青春のいちページなんて陳腐な表現しか出来ませんが、彼女達のちょっとドジで、ハチャメチャで、ワクワクして、いつもダラダラしているみた いで、それでいて「やっぱりこの子達、一生懸命に活きているんだ」と気づかされる。その生な感じ、ライブな感じ。それが多くの「けいおん！」ファンを生み 出した一つの要因じゃないかなと思います。

「けいおん！」は劇中歌でも数々のヒット曲を生み出しました。その中でもファンが絶対泣いちゃう特別な一曲「天使にふれたよ」のメイキングストーリーが作品の中で盛り込まれています。これはバンドメンバーの中のただ一人の後輩、「あずにゃん」に贈られた曲です。唯達が卒業記念に彼女を天使に見立てて謳い上げた曲です。でも僕たち「けいおん！」ファンにとっては彼女達一人一人が二次元の天使達なのです。これからも彼女達は僕たちファンの心の中で天使であり続ける事でしょう。

ーでもね会えたよ　素敵な映画にー
ー映画は終わりじゃない　これからも仲間だからー

そんなメッセージを五人の天使達に送りたいと思います。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆☆

配役　☆☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

美術　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　山田尚子

主演　（声優）　　豊崎愛生、日笠陽子、佐藤聡美

製作　　２０１１年

上映時間　１１０分

公式HPでの予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.tbs.co.jp/anime/k-on/trailer/trailer.html

ロボジー

２０１２年1月１５日鑑賞

＊＊＊　マイルドな矢口テイスト　　＊＊＊

僕が映画ファンになったきっかけを作ってくれたのが「スウィングガールズ」という映画。その監督が矢口監督でした。
矢口監督は映画における嘘とか、あり得ない設定だとか、そのくせ、それを実現させるための徹底したリアリズムの追求、という相反する事を、実にうまく融合させてしまう監督さんだとおもいます
　今回の「ロボジー」についてもロボットとおじいちゃんという二つの素材をうまく融合させたストーリー展開になっています。
　最先端の二足歩行ロボットと思ったら、実はその中におじいちゃんが入っていた、というまさかのストーリー。
　実は矢口監督らしさというのは、そのストーリーが坂を転がる様に加速してゆき、これはあわや制御不可能か？　と思わせる程脱線してゆく、その過程が面白いわけですね。
　また、矢口監督自身の徹底したオタクっぽさも魅力の一つです。
　今回の「ロボジー」ではその辺りがややマイルドになり、万人受けする様に作られている印象を持ちましたね。
　作品の中心人物のおじいちゃん。その家族との関係も描かれてはいるのですが、ちょっと物足りない感じもします。そこをポイントに物語の井戸をさらに掘ってゆけば、おじいちゃんの孤独感や人間性が浮き彫りになったのではないでしょうか？
もちろん、矢口監督作品らしく楽しめる作品には仕上がっていますので、お金を払って観て損はない作品だとおもいます。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
美術　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　矢口史靖
主演　　五十嵐信次郎、吉高由里子、濱田岳
製作　　２０１１年　日本
上映時間　１１１分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=sJGOF252SZI

DOCUMENTARY of AKB48 Show must go on 少女たちは傷つきながら、夢を見る

２０１２年２月１２日鑑賞

＊＊＊未来の日本を映すささやかな予告編＊＊＊

歴史的に大きな震災があった年。それが２０１１年である。
あの３：１１以降、心ある人々は思った事だろう。自分は何を成すべきなのか？
AKB４８というアイドルグループも例外ではない。
「アイドル」と「震災」と言う全くのミスマッチ。
この映画はそのミスマッチを真正面から捉えた。自分たちは何物であるのか？　この震災の中で歌って踊っていていいのだろうか？戸惑いが彼女達を襲う。でも彼女達はそれと正面から向きあった。また、向きあわざるを得なかったと言える。メンバーの中には震災を直接体験した者もいるのだ。
やがて彼女達は被災地を定期的に訪れ、ミニコンサートを開くという活動を開始する。
全くの無償だ。
費用は持ち出し。
衣装は被災地の方の心情を考慮しTシャツに短パン。
ステージは大型トレーラーの荷台の上だ。
華やかさとはかけ離れたステージだ。
それでもAKBが来てくれるというだけで、被災地の方は大変な喜び様だった。そして何より子供たちに元気を与えた。印象的なシーンがあった。
小さな女の子が手に花を持ってステージに駆け寄る。小さな手に持った花束。
お世辞にも美しいとは言えなかった。
しかし、それは根こそぎ何もかも持ってゆかれた被災地に、ようやく咲いた可憐な花だった。
その女の子はこの日の為に、自ら小さな手でひと掴みの花を摘み、花束とした。
AKBメンバーの一人、峯岸みなみがその花束をステージに這いつくばるように身を低くしながら受け取った。
観ているこちらが思わず目頭が熱くなる光景だった。しかし峯岸みなみは後のインタビューでこのときの事を後悔したと告白する。
「なぜ自分はステージから降りて女の子のそばに駆け寄れなかったんだろう。なんで自分は女の子と同じ目線の高さに寄り添ってあげられなかったんだろう」そう言って目に涙を浮かべた。
　いったい、アイドルとはどういう存在であるべきなのだろう？また、そもそもアイドルとは何だろう？
世相を反映するもの、大衆が作り上げるもの、マスコミが作ったもの、有名になりたいという個人の欲望が作り上げるもの。いろんな一面があるだろう。確かに言える事は、アイドルは時代を写し取る鏡であるということだ。
　２０１１年の日本を写し取る鏡の役割を果たしたもの。それを一つ上げるとすれば、多くの人々がAKB４８という女の子達の集合体を上げるだろう。それは不思議な力を持った日本を写し取

る魅力的な鏡である。大人達の思惑に踊らされているだけだと言う冷めた見方もあるだろう。しかし日本の少年少女達から彼女達は圧倒的な支持を得た。
　そう言った現象を観ていると、実は案外、その世相を映す鏡と言う役割は、かなり正確にその機能を発揮しているのではないかと思う。
　日本人は今、夢が欲しい。日本人は今、ワクワクしたい。日本人は今何かに熱中したり、熱狂したりするものが欲しい。その日本人の心情が放つ光線を集中して受け止め、ステージやテレビに反射させたのがAKB４８という存在なのではないだろうか？
　その強力な力は、特に２０１１年に於いて正に魔法の鏡と言ってよかったと思う。
　ただ、鏡である彼女達はまた、生身の人間でもある。西武ドームでのコンサート。
真夏の過酷な舞台裏での彼女達の格闘が始まる。がむしゃらに公演に取り組む彼女達を、緊張と真夏の熱さが襲う。次々に過呼吸と熱中症でばたばたと倒れてゆく彼女達。カメラはその瞬間を冷酷なまでに捉え続ける。華やかな舞台の裏でこのような状況があった事は、このドキュメンタリーでしか観る事が出来ない。
　やがて年末。１２月３０日。AKB４８にとって記念すべき日となった。
日本レコード大賞の受賞である。ようやく世間は彼女達が日本を代表するアーティストであると認めざるを得なくなったのだ。彼女達にとって待ちに待った”勲章”が与えられた瞬間だった。２０１１年、アイドルとして、また日本の音楽界の頂点にまで上り詰めた彼女達。
一体これから先、彼女達はどこへ向かうのか？
あるテレビ番組で前田敦子は語っている。
「レコード大賞をもらったときに、まだまだ目指せる先があるなと思いました」と。
　彼女達にはきっと自分達なりに、これから先の事も見えてきているのだろう。
日本を映す鏡としての役割から、逆に日本の未来の姿をスクリーンに投影する様な存在であってほしい。ファンの一人として僕は思う。
このドキュメンタリーを観終わってふと思った事がある。
彼女達はまぎれもない、これからの日本を作ってゆく世代なのである。サブタイトルにもあるように、彼女達は傷つきながらも夢を追いかけている。もしかするとこのドキュメンタリー映画は未来の日本のささやかな予告編なのかもしれない、きっとそうあってほしい。僕はそう感じた。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆
美術　☆☆
音楽　☆☆☆
総合評価　☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ

監督　　高橋栄樹

主演　　AKB４８

製作　　２０１１年　日本

上映時間　１２１分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=VKkhGW1LQrA&feature

ALWAYS 三丁目の夕日'64

２０１２年３月９日鑑賞

＊＊＊１９６４、夢見る人びとがそこにいた＊＊＊

この三丁目の夕日シリーズも三作目ですね。今回は３Dで登場なのですが、ぼくは２Dで鑑賞しました。
作品中のヒロイン、六ちゃんもお年頃になりました。
今回は彼女の恋人役に森山未来君がキャスティングされています。
誠実そうで好感の持てる青年医師を淡々と演じております。
更には茶川先生の養子、子役の須賀健太くんはリアルに成長しまして今回は中学生役。
　第一作を観た方は「ああ、あれから何年もたったんだなぁ」と感慨無量でしょう。
　小雪さんも今回は妊婦役で登場、大きなお腹の小雪さんってあまり想像出来なかったけれど、現実でも小雪さんは出産を体験しておりますので、まさにいいタイミングで映画製作をしたものだと思います。
　作中人物は皆、それぞれ明日の自分の姿を夢見ながら生きている感じがします。
　時代背景となった１９６４年。東京オリンピックの年。
　テレビはカラー放送が開始。当時僕は四歳の、ほんの子供でした。おぼろげながらですが、オリンピックの放送を家族で観たような記憶があるのです。
　また、当時カラーテレビはまだまだ高嶺の花でした。しかもカラーで放送している番組が少なかった。新聞のテレビ欄には、確か１９７０年頃まで，カラー放送の場合、番組タイトルの横に、わざわざ「カラー」という表示がありました。
　新幹線も開通し、青年期のような若々しさを持つ日本は、正にイケイケどんどんの時代に突入しつつありました。そんな明るい楽天主義者達の日本の姿。
そして今……
３：１１以降のあとに、こういった作品が公開される事にある種の感慨を覚えます。
　すでに日本は夢見る頃を過ぎてしまった、壮年の国になってしまいました。
しかも満身創痍の状態です。
そこで大事な事。人と人とのかかわり合い方、そして助け合い方。
　三丁目の住人達の、多少、他人のプライバシーに突っ込み過ぎの部分も、今となっては懐かしい感じがしますね。
これもご近所の付き合い方の一つのヒントなのかなぁと思います。
最後に、この作品では親と子の成長、そして親離れ、子離れについてもさらりと描かれています。特に茶川先生と息子の間には、親子からライバルとしての関係が芽生えていきます。
こういった濃密な人間関係を描く本作。
人と人とはどうかかわっていけばいいのか？
　３•１１以降の人間関係へ、一つの提案を投げかけている作品と読み取れるかもしれません。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆☆

配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆

美術　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　山崎貴

主演　　吉岡秀隆、小雪、堤真一

製作　　２０１１年

上映時間　１４２分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=lDkqWOA4gOA&feature

はやぶさ 遥かなる帰還

２０１２年３月１１日鑑賞

＊＊＊主演　渡辺謙、それに尽きる＊＊＊

各社がこぞって共作した小惑星探査機「はやぶさ」のストーリー。本作は渡辺謙が主演する、というのが魅力だ。
本作の特徴は、はやぶさを打ち上げる前の段階を、思い切ってはしょってしまった事だ。それが吉と出るか凶と出るか？　残念ながら結果は芳しくなかったと思う。
　というのも、打ち上げ前の段階、はやぶさをつくりあげたのは実は小さな町工場の技術者達、その手仕事の部分が大きかった事、予算の獲得の為に東奔西走したりした事、
何とか無事にはやぶさを飛ばそうと懸命に頑張る運営者たちの姿「これ、ほんとうに打ち上げにたどりつくのか？」というぐらいの緊迫感、また、胸が締め付けられるぐらいの、すったもんだの艱難辛苦。それらを経て、ようやく打ち上げに漕ぎ着けると言うストーリーの助走部分。やはり我々観客にとっては、そう言った過程を通して、初めて「はやぶさ」への擬人化や、いとおしさがうまれてくるのだと思う。
　ところが本作では、まるで季節外れの打ち上げ花火のように、シュポッとロケットは打ち上がる。なんだが間の抜けた感じであっけない。まるで気の抜けたソーダだ。
擬人化という部分では更に残念な事に、本作ではなるべくストーリーをクールで行こう、淡々としたタッチで行こう、としてしまった。
　客観的に物事を見ようとする。それ自体は悪い事ではない。
ただ、本作の場合そのことによって余計に「はやぶさ」が、よそよそしい機械部品の固まりになってしまったかの様な印象なのである。まあ、実際、部品の固まりなんだけど。
だが、はるか６０億キロと言う気の遠くなるような、未知の道程に挑んだはやぶさ。機械の固まりとは言え、さぞや一人で心細かった事だろうと思う。
さらにはその長い旅をようやく終えて地球に帰ってきても、自らは燃え尽きてしまう。自分のミッション達成の証と言える小さなカプセルに全ての旅の想いを込めて。
　自らは壮絶な火の球となり、バラバラに燃え尽きてしまうと言う、これはまるで宮沢賢治のファンタジックな童話に出てきそうなお話だ。
　実際、リアルな、はやぶさ帰還のニュース映像を観ただけで、なんだが日本人の根底に流れる、人情とか自己犠牲の精神だとか、そう言った「浪花節的な」感情をひっくるめて、僕を含め、多くの人がはやぶさに感情移入したと思う。
本作の製作者達がそれらの事をふまえて、もう少し感情移入させやすい様なタッチで描いてもよかったのでないかと思うのだ。
確かに「お涙頂戴は辞めておこう」という制作側の意図は痛い程よく伝わってきている。
　それならば徹底したリアリズムが必要になると思うのだ。
その向こう側に、”図らずも”ロマンが見えてしまった、という雰囲気を出したかったんだなぁ、という監督の意図は分る。

しかし、本作ではそのリアルさもやや凡庸である感じがどうしても拭えなかった。
この作品の最も大きな魅力は結局ただ一つ、主演が「渡辺謙」である、その事に尽きると思う。
はやぶさを扱った作品では、先に公開された竹内結子主演の「はやぶさ/HAYABUSA」の方を、いち「はやぶさファン」としてはお勧めしたい。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆
美術　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆
総合評価　☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　瀧本智行
主演　　渡辺謙、江口洋介、夏川結衣
製作　　２０１２年　日本
上映時間　１３６分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=7u4L3qtUztg&feature

２０１２年５月１２日鑑賞

＊＊＊心の穴ぼこには、ねこエネルギーをどうぞ＊＊＊

僕の様なネコ好きが、しばらくネコと触れ合わないとどうなるか？
それは悲 惨である。
クルマならガス欠状態、携帯電話なら電池切れ。
にっちもさっちも動きがとれない。
人間そのものがそう言う「ねこ欠、ねこ切れ」を起すのだ。
そん な僕は「藁をもすがる」思いで「ネコカフェ」という場所に、ふらふらと迷いこんだ事がある。
カフェの入口で店長さんから注意事項を聞き、手を消毒する。ちょうど二人連れの女性客と同時に店内に入った。あのときの異様な光景が目に焼き付いている。
二人の女性客はいきなり奇声を発した。
「キャァー！！〇〇ちゃ～～ん！！」
お 目当てのネコめがけてまっしぐら。
その店は雑誌に何度も紹介されていた人気のネコカフェだった。「ネコスタッフ」とよばれる、ねこ本人達は皆、血統書付きのブランドネコ達ばかり だった。実は僕はその店で、このネコ達から全く無視されてしまった。もう、人間から、ちやほやされるのが当たり前になってしまっているネコスタッフ達なの だろう。
「ああ、ここはネコの高級クラブだったのだ」とおもった。
あるいはネコのホストクラブか？
優雅な仕草でフロアに侍っているネ コ達。
それは、きらびやかなドレスと、目も眩むばかりの高級ジュエリーで飾り立てた、いわゆるウォータービジネス系の女性達を彷彿とさせた。何とも場違い なところに足を踏み入れてしまったものだと後悔した。
その後、僕の記憶は不確かだ。目の前でキャーキャーはしゃいでいる女性客たち。
奇声と狂喜乱舞 。
その有様を呆然と眺めていたようにおもう。
ずいぶん前置きが長くなりました。すいません。
本作「レンタネコ」に出てくるネコ達は、こういう高級なネコ達では ないのです。
どこらへんにでもいる雑種の元野良猫たち。それを心淋しい人達に貸すという、趣味とも商売とも言えない様な事をやっている独身女性、サヨコさ んが主人公です。
　僕がこの作品を観にいきたいと思ったのは、大好きな荻上直子監督の、ネコを扱った作品と聞いたから。
精神的に落ち込んでいたの で、荻上監督の映画でも観て、スクリーンに映るネコ達に癒されてこようと思ったのです。

荻上直子監督は、今や多くの映画ファン、特に女性に人気がある様で す。
「かもめ食堂」「めがね」あの二作品を観た時、劇場に足を運んだ観客の（それも多くが女性だった）一種、異様とも言える熱気、興奮。
僕は今だに鮮明に 覚えております。
あの二作品で荻上直子監督は、カッコいい言い方をすれば、彼女自身の「映画文法」を確立したと僕は思うんですね。
その作風は誰にも真似出 来ない。
ふんわりしているけど中身は実は骨太。
幸せな気分にさせてくれて、そのくせちょっと哲学的なメッセージ性、監督がさりげなく埋め込んだ謎解きとト リック。
僕を含め多くの観客がその魅力に取り憑かれてしまいました。その注目監督の新作となれば当然期待も高まる。ハードルもいやが上にも上がってしま う。監督業というのも大変ですなぁ〜と思ってしまいます。
前作「トイレット」も、まさに期待しすぎた為に、ちょっと肩すかしを食らった様な作品でした。本作 「レンタネコ」もそうならなければいいけれど……と思いながなスクリーンを眺めていました。
率直な印象を言えば、最後にもうひと捻り欲しかったなぁという 感じです。
主人公を演じた市川美日子は個性的でいいキャラクターです。美人と言うにはちょっと違う感じがするけれど、個性的な気になる女優さんです。脇を固めるキャ ストもいいです。とくに光石研さんの演技には思わず、もらい泣きしそうでした。あまりに愛おしくて、あまりに痛々しくて。
毎日のようにゼリーを作り続けて いる一人暮らしのおばあちゃんの設定もよかった。
荻上直子作品には食べ物が大きな要素として出てきますね。
今回はゼリー、そしてドーナッツ。
レンタカー屋 に務めている孤独な女性は、そのドーナッツの穴を食べようと工夫する。何もない空間を食べようとする行為。
ここらあたりの謎解きの様な仕掛けも荻上直子監督 ならではです。
登場人物はみんな心にどこかポッカリと穴の開いた人達です。その人達の心の穴を埋める為にネコを貸し出している主人公サヨコ。
でも彼女自身 もまた、ネコ達と暮らしてはいるが、何か満たされないものがある。その主人公の心の救いをどのように描くのだろうと、ラストシーンへ向け興味がわきます。
荻 上直子監督、どうやってうまく落しどころを探すのだろう。そう言う興味がわく作品です。
じっくりネコ達に癒されながらお楽しみください。最後に荻上直子 ファンとして注文をひとつ。
なるべくナレーションを少なくする方向で次回作はお願いしたいです。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆
配役　☆☆☆☆

演出　☆☆☆

美術　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　荻上直子

主演　　市川美日子、草村礼子、光石研

製作　　２０１１年

上映時間　１１０分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=C2jURrW0UhY

２０１２年6月17日鑑賞

＊＊＊ああ～、さっぱりしたぁ～＊＊＊

なんだろう。この爽やかさは。
そう、まさにひとっ風呂浴びて、銭湯から出てゆくときの、すがすがしさ。観終わってそんな感覚が残ります。
　なんの予備知識もなく、所々、ゲラゲラ笑いながら観終わってエンドロールを眺めていたら、監督はあの「のだめシリーズ」を撮った武内監督なのですね。「ああ、道理で」と思いました。作品の面白さへのこだわり、観客を楽しませること。それについてはハンパではない監督さんですね。
コメディ作品というのは、実は小手先で笑わせてはいけないというのがあります。骨格となるストーリーや演技について突き詰めていく。更には舞台装置にも手抜き無しに徹底的に作り込んでゆく。その舞台装置の上で役者さんは大真面目に演じる。そこから立ち上がってゆく笑いがあるのです。
「のだめシリーズ」を撮った武内監督だからこそ、その辺を実によく分かっておられるんですね。手堅く、手抜き無しに作ったらこういう面白い作品になった。本作はそう言う笑いに大真面目で取り組んだ力作だと思います。
僕はいつも言いますが、映画は脚本とキャスティングで八割方決まります。これは映画成功の方程式とも言えるでしょうね。本作の原作は大ヒットコミック、そしてキャスティングはローマ人を演じるにふさわしい、実に顔の濃い役者さんが勢揃いしました。主役の阿部寛さん。いいですねぇ、映画に取り組む姿勢が大真面目なんです。コメディなんですけどね。何せ題材がお風呂なもんでヌードシーンなんかもある。それでも体を張った演技をしてくれています。
最近はNHKのスペシャルドラマ「坂の上の雲」に出演して、日本騎兵の父と呼ばれた陸軍大将、秋山好古を好演しました。
普通、こういう大きい役をやってしまうと、どうしても人間ピノキオみたいにハナが伸びてくる。格好付けたいとか、大物ぶりたいとか、という欲が出てくる。でもね、阿部寛さんのエラいところはそう言うところ微塵も見せないんですね。
実は、この作品の良さは、ひとえに阿部寛さんを始めとする役者さん達の「くそ真面目に」コメディと取り組んでいる姿そのものにあるのです。
役者さん達の「真面目さ」がもう、いてもたってもいられないぐらい面白いんですね。
　その辺り、武内監督の狙い、演出プランはバッチリ的中してます。
ストーリーは古代ローマの浴場設計技師のルシウス（阿部寛）がタイムスリップして２１世紀の日本の浴室に現れてしまう。そこで彼は、全く見た事もない日本のお風呂文化にいたく感銘を受けます。
彼は何度も古代ローマと２１世紀日本を行ったり来たりしては、古代ローマの浴場に日本のお風呂文化を持ち込んでゆく、というものです。

しかし、こんなぶっ飛んだストーリー、どうやってコミックの読者や映画の観客に納得させるのか？　そこで大事になってくるのが、時代考証というやつ。
古代ローマ時代の背景や当時の皇帝の考え方。それにローマ市民の文化などなど、観てるだけで色々と勉強になって興味深いですね。
特にローマ市民というのは、労働、苦役というものは奴隷にさせていた訳で、市民は日々享楽的な日々を過ごしていたものと思われます。（ただ、名誉としての兵役はあった様ですが）そして人間暇を持て余したところに出てくるのが、文化芸術というものです。
衣食足りて礼節を知るではありませんが、ちゃんと食える事が保証されているからこそ、豊かな文化や芸術が花開くのでしょう。
ある本で読んだのですが、何代目かのローマ皇帝の言葉として「パンと娯楽を与えておけ、さすれば民は幸福であろう」というのがあります。これは頸を傾げる部分もあるのですが、実に的を得ているコトバでもありまして。
つまり、世の「まつりごと」を司る立場にいる人間は、何を一番大事にするか？
ズバリ「人民を飢えさせない事です」
どこかの国のように「オニギリ食べたい」といって餓死者が出る様な国は、すでに政府は崩壊しておるのであります。
一人でも餓死者が出たら、即刻議会を解散し、総選挙をするようになれば、多少はましな国になると思いますが……
まあ、これは私の戯れ言でございます。さて、本作を観て感じるところですが、やはり古代ローマを経て、現代のローマ、イタリアに通じる、どこか楽天的で享楽的なラテンのテイストを感じます。大いに飲み食べ、エンターテイメントに興じ、そして風呂を愛する。その風呂を愛する気持ちって、なんか古代ローマも、現代の日本人も本質的なところは分り合える様な気がします。
だからちょっと、荒唐無稽なストーリーとおもいつつも、日本人の一人として妙に納得してしまう部分があるのですね。最後にローマ皇帝ハドリアヌスを熱演した市川正親さんが、とても印象的でした。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆☆
美術　☆☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　武内英樹
主演　　阿部寛、上戸彩、市村正親

製作　　２０１２年

上映時間　１０８分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=naLPpDqoFu8

11・25自決の日 三島由紀夫と若者たち

２０１２年６月２２日鑑賞

＊＊＊三島由紀夫「美しき日本人の自決」＊＊＊

この作品を観終わったあと、何とも重苦しい余韻が残った。

　ちょっと映画の酔いを覚まそうと、近くの大手デパートに立ち寄った。食料品売り場をうろついてみる。自分が住んでいる神戸と言う土地柄もあって、ケーキなどのスウィーツが芸術的な美しさでショーケースに並べられている。

「三島さん、死んじまったらこんな美しいものも、美味いものも味わえないよ」

　本作は三島由紀夫氏が「楯の会」を作り自衛隊市ヶ谷駐屯地にて自決するまでをドキュメンタリータッチで描いたものだ。監督の若松孝二氏は前作「キャタピラー」や「連合赤軍あさま山荘への道」などのインパクトの強い作品を世に問い続けておられる映画作家である。

　いわゆる三島事件が起こったのは１９７０年１１月２５日

僕はまだ小学生だった。その当時、世の中は学園紛争や６８年に原子力空母エンタープライズが寄港したりと、騒がしかった。反面、表舞台では大阪千里で万国博覧会が開催されたりと、何か時代がごった煮の中にいる様な雰囲気が、子供の僕にも感じられる様な世相だった。

　後にあの当時の学生達は何をしようとしていたのか？　興味がむくむくと持ち上がって来た。全共闘関連の写真集や書籍などをパラパラとめくってみた。その中に三島由紀夫VS東大全共闘、という討論会があった事を知った。これは今でも伝説的な討論会という事になっている。

この映画作品については、やはり当時の時代背景などを少し予習する必要がある事は確かだ。

　三島氏は東大全共闘の学生達と熱気溢れる討論を行い対決した。三島氏が血気盛んな学生達と真正面から向きあっていたのが印象的だ。それはどこか三島氏が愛した日本古来の武士道に通じる、真剣勝負の場であったようにさえ感じられる。

　当時、ヘルメットを被りゲバ棒を振り回していた学生達と、三島氏が作った「楯の会」の若者達に共通しているものがある。

　それはどちらも真剣に、彼らなりに日本という国を憂い、愛していたということだ。

　三島氏の取った一連の行動、自衛隊への体験入隊、そして「楯の会」の結成。それは日本の昭和史においてある種、ドン•キホーテ的な行動だったのかもしれない。

　全くのブンガク音痴である僕は、三島氏の文学作品は「金閣寺」しか読んだことがない。

　しかし、そのあまりの文章の美しさに、

「ああ、作家とはこういう使命や宿命を背負わされているのだ」と愕然とした。

　そのあまりに純粋で透き通った美学は、その美しさを追求する事そのものが、生きる手段ではなく、目的に変化していったように思える。三島由紀夫は悲劇的な終着点を見いだす。それは「美しい日本人の死に方」という点に集約されるのである。

三島氏は最後まで美しく”散りたかった”のだろう。

その蒸留された精神のエッセンスは、自らの所持する日本刀により、血飛沫とともに市ヶ谷駐屯地に散った。

三島氏としては本望の自決だったのだろう。
彼にとって人生とは何だったのだろうと思う。自らが創造した三島由紀夫と言う”作品”を演じていたのだろうか？
彼自身がその演技に酔いしれ、ついには自家中毒を起してしまったかのように僕には思える。
彼の日本と日本人の心を守りたいとした精神性は、確かに危険な怪しい輝きを放っている。彼は自分の美意識に対して、一滴の不純物も混じる事を嫌ったのではないだろうか。
三島氏の自決後、確か作家の遠藤周作氏がこんな事を述べておられたように記憶している。
「三島の死は文学者でなければ葬ってやれないと思うよ」
あまりに純粋を求め続けた三島氏をどう捉えるかによって、この映画の評価は大きく分かれると思う。
僕としては三島氏にもっと長生きしてほしかった。
どんなに醜くなってもよい。そして老いても、がむしゃらに生きる三島氏と、その文学に再会したかったのである。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
美術　☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　若松孝二
主演　　三浦　新、満島真之介、寺島しのぶ
製作　　２０１１年
上映時間　１１９分
予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=xNlb4kvablQ

鬼に訊け 宮大工 西岡常一の遺言

２０１２年6月２3日鑑賞

＊＊＊千年先を見据えて「今」を研ぐ＊＊＊

　神戸シネリーブルにて鑑賞した。一日一回のみ上映で土曜日と言う事もあって、客席はほぼ満席に近かった。

　西岡常一さんは僕のような建築をかじった者なら、ほぼ間違いなく知っている。もはや伝説化された宮大工の棟梁である。

その人のドキュメンタリー映画を金を払ってでも観ようと言うのは、よほどの物好きか、あるいは建築オタクかと思ったのだが、客席を見渡すとご年配の方がほとんどだった。どうやら寺社建築と言う分野に関して、あるいは、西岡棟梁と同年代という親近感から劇場に足を運ばれたのだと推測した。

それにしても若い人が少ないのはもったいない。

西岡棟梁の仕事ぶりをぜひ若い世代に観てもらって、目に、心に焼き付けておいて欲しいと思う。

西岡さん自らの著書のタイトルにもある「木の命、木の心」というものについて、このドキュメンタリーは、棟梁自身の肉声で実に優しい口調で教えてくれている。

　伝説化された宮大工の棟梁とは、いったいどんな鬼のような存在かと思うが、映像を見る限りでは、拍子抜けするほど物静かで優しい眼差しを持っておられる方である。棟梁というよりまるで「茶人」を思わせる佇まいの人物である。

　西岡棟梁が手掛ける寺社建築は、そもそもスケールが違う。

建物の大きさ、精緻さという事もあるが、何より驚かされるのが、その耐用年数だ。

　建ててから一千年以上は保せる、という時間のスパンで考えているのである。

大学のエライ先生方でも「コンクリートは保って百年です」という。

　だから棟梁は木を使う。

　木にこだわる。

　棟梁の師匠にあたる祖父から伝えられた「木を買うな、山を買え」という教えを守る。

　気の遠くなるような年月を生き続ける寺社建築には、これも気の遠くなるような手間暇がかかるのだ。

「 弘法、筆を選ばず」などと言われるが、あれは大ウソだ。人並み優れた技能を持つ者は、道具についても人一倍こだわりを持つ。このドキュメンタリーでは、貴重な西岡棟梁の道具類も見る事ができる。

　綺麗だ。

　道具を見ているだけで、その人がどの様に仕事に取り組んできたのかが分かってしまう。

　何事もこの道一筋というのは、美しくもあり、尊い事であろう。浮気性で腰の落ち着かない自分を省みては、ため息ばかり出てきてしまう。

　きっと西岡棟梁だけではなく、後世に残る仕事を成し遂げる人というのは、言い訳をしない人

なのだろう。言い訳をしない生き方、自分に嘘をつかない生き方、そういう生き方が出来る人と言うのは、このドキュメンタリー映画にあるように、夕方仕事が終わってからも、明日の為に黙々とカンナやノミを研いでいる人達なのだろう。

　きっとそう言う人達は

「いや、自分にはこれしか出来ないからね」とはにかみながら、明日を夢見るために、「目の前の現実」を砥石で無骨に研ぎ続けるのだろう。

凡人の僕にとってはその砥石で研ぐべき「今起きている現実」と言うヤツに立ち向かう勇気が最も必要なのだが。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆☆

配役　☆☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

美術　☆☆☆☆☆

音楽　☆☆☆

総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　山崎佑次

製作　　２０１１年

上映時間　８８分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=fydWcQLpVtE

BRAVE HEARTS 海猿

２０１２年７月２９日鑑賞

＊＊＊この夏、「男」が泣ける、感動大作＊＊＊

観ている最中から、思わず男泣きしそうになった。映画レビューを書いている今、この時でも、あのシーン、このシーンを思い出しては胸が熱くなってくる。

「海猿シリーズ」のいいところは、カップルで観ても良し、親子で観ても楽しめることだ。子供から大人まで、それぞれが楽しめる守備範囲の広さは、他の映画ではなかなか実現出来ないのである。

　そして本作は、そんな幅広い観客を虜にする「海猿シリーズ」の中でも、とびっきりの感動を味わえる。正にシリーズ中、最高傑作と断言して構わない。

　今回は海に着水したジャンボ機から、乗客乗員を救助すると言うストーリーだ。

　　ジャンボ機が事故を起こし、ほとんど制御不能とも言える状態から着水するシーンまでは、もう一瞬たりとも目が離せない。

　本作は海猿シリーズでおなじみの伊藤英明、加藤あい、佐藤隆太というレギュラーメンバーに加え、「硫黄島からの手紙」で西竹一中佐を演じ、一躍、全世界が注目した伊原剛志が加わった。伊原氏の演技は力強く、スクリーン映えのする俳優である。

そして監督は羽住英一郎。

僕はこの人の画の作り方が好きだ。

安物のハリウッド映画やアクション映画にありがちな、細切れ編集をしない所も好感が持てる。

　「海猿シリーズ」を観ていていつも思うのは、皆の役者魂である。

この映画は役者にそれなりの覚悟を要求する。実際、救助シーンの撮影では、堰を切ったように浴びせかけられる大量の水と、役者は格闘しなければならない。

　もし僕が役者だったら、とてもじゃないが、こんな恐怖と危険が伴う撮影現場からサッサと逃げ出すだろう。

　しかし伊藤英明を始めとする俳優達は、正に本物の海難救助さながらの撮影現場に、歯を食いしばってガンバっている。何としても最高の映画を作るんだ、と言う意気込みがスクリーンからも伝わってくる。この体を張った演技も、「海猿シリーズ」の大きな魅力のひとつだ。

　そして「海猿シリーズ」で忘れてはならないのは「仙崎」と言う、「いち家族」のドラマでもあると言う所だ。

　仙崎は結婚し、やがて太陽君と言う男の子が生まれた。我々観客は、シリーズが新しくなるごとに、この太陽君の成長を見守る事になる。

　危険な任務から、無事愛する家族の元へ帰り着く事。仙崎の帰りを迎えてくれる太陽君とカンナさんの笑顔。

　ハリウッド映画の「タイタニック」や「アポロ１３」に匹敵する愛と感動を、ストレートにゴツンとコブシでぶつけてくれる作品である。

なお、上映時間１１６分。

もうこれ以上、どこも削る事が出来ないカットばかりだ。
二時間を切る作品にギュッと込められたスタッフ達の熱い想い。
この夏、絶対のお勧め作品！　なお、ハンカチのご用意もお忘れなく。
（なお、僕の主義として新作映画の最高点はいつも四点にしています。ご了承ください）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
美術　☆☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　羽住英一郎
主演　　伊藤英明、加藤あい、佐藤隆太
製作　　２０１２年　日本
上映時間　１１６分
予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=43bIPYFPt2k

２０１２年７月３０日鑑賞

＊＊＊読むのも苦役、観るのも苦役？　＊＊＊

まずお断りしておくが、僕は原作を途中まで読んで放り投げた。「苦役列車」というタイトルどおり、僕にとって読むという行為そのものが苦役に感じられる作品だったからだ。

　本作の主人公、北町貫多。彼の生き方はまるで野生動物の様だ。

　腹一杯メシを喰らい、飲みたいだけ酒を飲む。そして性欲の赴くまま風俗店に入り浸っている。肉体労働で稼いだ金は、後先考えることなく使ってしまう。だからボロい安アパートの家賃さえ何ヶ月もため込んでしまう。

　まさに「自堕落」を絵に描いたような生活だ。

　自分は人間のクズなのか？ と自問自答してみる。

「どうせ中卒だしな」

「この世の中、俺みたいな人間は、努力したって、夢見たって、どうにもならないんだよ」とニヒリズムの世界にどっぷりと首まで浸かっている彼。というのも、父親が性犯罪者であるという、とびきり重い十字架を背負わされているのだ。

　こういう重い内容の作品なのである。

　しかも監督は、これも「くせ者」の山下敦弘監督なのだ。

　僕はキライな監督ではない。だが、好きな監督だ、とも言い難い。ただハッキリと言えるのは、山下監督が彼独自の映画文法をもっているということだ。映画マニアならニヤッとしてしまう画を撮る監督なのである。

　鋭い人なら僕が何を言いたいのか、もうお分かりだろう。

そう、ご想像の通り。なんでこんなマニアックな作品に、「前田敦子」が出演しているのか？ という素朴な疑問である。

　彼女は今日本で最も有名な人物の1人である。

「国民的アイドルグループ」という枕言葉が付く組織のセンターポジション、「絶対的エース」とまで言われる地位に登りつめた。その前田敦子が本作のヒロインを演じる。

もちろんキャスティングに関しては、興業収入を意識し、配慮もされている事は間違いないだろう。

ただ、伝え聞くところによると、彼女は今回のオファーに関して進んでOKを出したようなのだ。

　実は彼女、大の映画ファンであるらしい。これからは女優を目指したいとも表明している。

確かに本作を観る限り、

「アイドルとして”ヤってもいい”ライン」

を超えた演技を見せている。また山下監督も、彼女を一人の「新人女優」として結構ビシビシと鍛え上げているように見受けられた。 彼女の演技については、僕の見た限りでは、まだまだ発展途上としか言いようがない。これから一皮も二皮も脱皮が必要なぺーぺーの駆け出し女優である。

それと対照的に、主人公、北町貫多を演じた森山未來君の演技は素晴らしかった。これだけ身も心も荒んだボロボロの人物を良く演じた。微妙な表情の表現も良かったと思う。
　ボロボロの人物を演じるという事では、李相日監督の「悪人」を思い出す。主演の妻夫木聡君の凄まじいまでの変身ぶりは凄みがあった。本作で主演の森山君は、その近くまでは肉迫したのではないだろうか。
本作は「アイドル前田敦子」を見に行った観客は拒否反応を示すかもしれない。
しかし、「女優としての」前田敦子ファン、そして日本映画界での貴重なキャラクター俳優、森山未來君のファンであれば一見の価値ある作品と言えるだろう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆
美術　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　山下敦弘
主演　　森山未來、高良健吾、前田敦子
製作　　２０１２年
上映時間　１１４分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=qVY0w2Saa04

２０１２年８月３０日鑑賞

＊＊＊拝啓　高倉健様へ＊＊＊

拝啓　高倉健様

　また、あなたのお元気な姿をスクリーンで拝見する事が出来て、喜びに打ち震えております。この作品を拝見しまして、いち映画ファンとして感極まってしまいまして、居ても立ってもいられず、こうしてお手紙をしたためておる次第です。

　思えば不思議なものですね。あなた様がスクリーンに現れる、そしてちょっと無愛想とも思える背中、それを見ただけでファンの一人として思わず涙ぐんでしまうのです。

　高倉健様、どうしてあなたはあんなにも海がお似合いなのでしょうか。

　海。沈む太陽。波間に浮かぶ小さな漁船。

　降旗監督はとても美しい叙情溢れる絵画の様な作品にして下さいました。

　ビートたけしさんと高倉健様が、オートキャンプ場で沈む夕日を眺めながら、差し向かいでお茶を飲むシーン。あれは正に絵画です。あのまま額縁に入れて美術館や博物館に飾るべきだと思いました。

　今回のストーリーは亡くなった奥さんの遺言「自分が死んだら故郷の海に散骨してほしい」と言う想いを叶えるため、夫が富山から長崎へ向かうと言うロードムービーです。

　そう言えば私が初めて高倉健様を拝見したのは「幸せの黄色いハンカチ」でした。思えばあの作品もロードムービーの形式でありました。お恥ずかしい事ですが、私はその時は映画ファンではありませんでして、高倉健様のそれ以前の任侠映画作品なども全く存じ上げませんでした。しかし「幸せの黄色いハンカチ」以降あなた様の作品は是非見てみたいと思いました。「四十七人の刺客」「ブラックレイン」等が、強烈な印象として残っております。

　高倉健様、あなた様は日本の中高年のあこがれです。「健さんのように男としての年輪を重ねていきたい」そう思わせてくれる人物のひとつの理想型であると思います。

　あなた様のその節くれ立った手、無骨な背中が「人はどう生きるべきか」を雄弁に語ってくれています。あなた様にセリフなど必要ないのです。ただ、風景の中にひとりの人間として、二本の足でしっかりと大地を捉えて立っておられる姿、それだけでもう十分すぎるぐらいです。それで絵になってしまうのです。そう言う人を表現する言葉がひとつだけあります。

それが「スター」です。

どうかこれからも我々中高年、いや、日本人全ての輝ける「スター」であり続けて下さい。

　人は悩んだり傷ついたり致します。そのとき心の羅針盤は、ぐらぐらゆれうごきます。どこを目指していいのだろうと途方に暮れます。その時に人は発見するのです。「高倉健」という「北極星」があるではないかと。

　「高倉健」という「スター」が北極星のようにいつまでも天空の中心で輝き続けてほしいとおもいます。いつの日か再びスクリーンでお会い出来る日を楽しみにしております。いつまでもお元気でいて下さい。長文失礼致しました。　　敬具

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）

物語　☆☆☆☆

配役　☆☆☆☆☆

演出　☆☆☆☆

美術　☆☆☆☆

音楽　☆☆☆☆

総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　降旗康男

主演　　高倉健、田中裕子、佐藤浩市、ビートたけし

製作　　２０１２年

上映時間　１１１分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=qrU_iyvjJQI

２０１２年９月３０日鑑賞

＊＊＊天才監督のハートは温かだった＊＊＊

「運命じゃない人」を初めて観たとき「あっ、とんでもない天才監督が出た！！」と思った。僕はもう、居ても立ってもいられず、興奮して映画レビューを書き綴った。内田けんじという監督は「映画にキュビズムを持ち込んだ天才である」と。本作はその内田けんじ監督の劇場公開三作目となる。

記憶喪失となった殺し屋と、それを知った売れない俳優志望の劇団員。その立場が入れ替わる、というストーリー。

この脚本、実に良く出来ている。各所に伏線が張ってあるから、観客である僕たちは、スクリーンから一時も目が離せなくなる。

冒頭に出てくる広末涼子、彼女は雑誌の編集者である。一見、このお話と何の関係もなさそうな人物である。自分には彼氏もまだいないのに、突然自分は結婚すると言い出し、予定日まで決めてしまう。彼女は几帳面でメモ魔である。何でもスケジュール帳にメモし、とにかく自分の予定を埋めないと気が済まないタイプの人だ。

僕の知人にもこういう人はいたので、思わずニヤリとしてしまった。彼女の雑誌は、世界の超一流品を紹介すると言う企画物である。これが第一の伏線ですよ。皆さん、よく覚えておいてね。

さて、依頼主からの仕事を終えた殺し屋。これが香川照之。一見ゴルゴ１３のようだ。苦みばしった、クールで一切妥協のない厳しさ溢れる顔をしている。

眼付きがすごい。これがプロの殺し屋の目だ、と言わんばかりの表情だ。

彼は一仕事追えた後、風呂屋に入った。これがいけなかった。風呂場に入ろうとしたその瞬間、誤って石けんを踏んでしまった。彼は転んで記憶喪失になってしまう。その時たまたま風呂屋で居合わせたのが、売れない、しょぼくれた劇団員。これを堺雅人が演じる。

だいたいね、皆さん、この映画、キャストからして、もう最高でしょうよ。今、日本映画界で一番脂が乗り切っている、人気実力共に揃った「技巧派」俳優二人が演技バトルをする訳です。面白くない訳がない。

二人はお互いの立場を入れ替えた。売れない劇団員は、たまたま殺し屋を演じなければならなくなった。貧乏アパートから一転高級外車を乗り回し、ポケットには札束がたんまり入るご身分となった。

一方、元殺し屋は記憶喪失になってしまい、いったい自分が誰で、どこに住んでいたのかも分らなくなってしまった。

彼はノートを一冊買った。そして自分は何者なのかを、そのノートに丁寧に丹念に書き込んでゆくのである。

職業は劇団員であること。自分の性格は？　好きな食べ物は？等など、その誠実な人柄、謙虚で、人に優しく、物腰は柔らかく、あまりにもいじらしく、思わず哀れさえ感じさせてしまう。まさか、この人が、さっきまでゴルゴ１３の様な眼付きをしていたのかと思わせる変身ぶりである

。
これぞ、カメレオン役者、香川照之の真骨頂。
　この作品をみていると「テクニックの見本市」なのではないかと思えてきた。監督と脚本のテクニック、そして役を演じる俳優のテクニック。それらを思う存分ぶつけ合った作品なのだと感じた。ここで大事なのは、技巧派の監督と、技巧派の役者が「ガチンコ勝負」をした時、出来上がった作品が、単なるテクニックの遊びになってしまう恐れがあるという事だ。
　技巧派の監督が陥りやすい罠、それは自分の才能に酔ってしまう事である。それにより、作品には心が通わなくなり、ドライでハートのない作品になってしまう。
　映画ファンからお叱りを受けることを覚悟で言うと、あの、「映画の教科書」と言われる「第三の男」「市民ケーン」は、僕は作品として見事だとは思うが、実は大嫌いなのである。
　なぜなら、あの作品の
「どうだ！オレ様の才能に恐れ入ったか！」
と言わんばかりのオーソン・ウェルズのドヤ顔が大嫌いだからだ。
　対照的に、たとえば従来の映画文法を破壊した、とまで言われるヌーベルバーグの代表作「勝手にしやがれ」
　この、まるで素人が撮ったんじゃないか？　と思わせる作品に心惹かれるのはなぜだろうか。そこにはもう一回見たいと思わせる何かがある。
　そう言う意味では、今回の内田けんじ監督の新作は、巧みなテクニックを見せつつも、決してドライにはなっていない。ちょっとホッとする様なウェットなエンディングに、内田監督の人間を捉えるハートの温かさを感じるのである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
美術　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　内田けんじ
主演　　堺雅人、香川照之、広末涼子
製作　　２０１２年
上映時間　１２８分
予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=ixaSheT4MVo

２０１２年１０月５日鑑賞

＊＊＊見上げてごらん、お江戸の星を＊＊＊

この人が出ているのなら映画館に行ってみよう。そう思わせる女優さんがいる。その一人が宮崎あおいである。
まあ、下賤な言い方をすれば、銭のとれる役者さんであり、客を引っ張って来れる役者さんである。
　ところで、最近にわかに人気が出てきているのは江戸時代。僕も大いに興味がある。やはり近頃のエコブームもあって、完全リサイクル社会であった「お江戸」の生活や文化などをもっと知りたいと思う人が増えているようだ。
そう言うとき、一番手っ取り早いのが、「映画を観る」という方法である。
お江戸を舞台にした映画を観れば、ものの二時間程で、当時の人の生活や文化を、実に手軽に知る事が出来る。おまけに面白いストーリーがあって、ごひいきの役者さんが演じてくれるのならば、そういう時代劇は見て損はない。
さて、本作「天地明察」は江戸時代に日本独自の暦を作ろうとした人々のお話。当時は、暦が何種類もあったことや、暦の制定の権限は朝廷が持っていた事など、初めて知る事ばかりだった。
また、江戸時代には「和算」という数学が発達していて、難しい数学の問題を絵馬に書いて神社に掲げ「解ける者がいればこれを解いてみよ」と言う、一種の知的ゲームがあった事なども、この映画から分る。
また当時の天体観測器具の大きな道具立ても興味深い。
それからこの作品には若き日の水戸光圀が出てくる。ビックリしたのはこの人、ワインを飲んでるのだ。異国の文化を柔軟に取り入れようとしていた、先進的な人だったのだと改めて感心する。また、黄門様の居室の豪華な事。こだわりの美術セットが大きなスクリーンで鑑賞出来る事は、時代劇映画ならではの楽しみだ。
今回の作品で印象に残ったのは、主人公、安井算哲（岡田准一）と共に全国での北極星観測の旅に出る笹野高史さん。
佇まいがいいですなぁ。
　武士という者は常に腰に大小の刀を差している。その時、どっしりと腰が据わった歩き方が出来る役者さんと、全く出来ない役者さんがいる。
黒澤明監督の代表作「七人の侍」を見ればよく分かる。昭和の名優、志村喬、剣の達人、久蔵役の宮口精二。加東大介、千秋実。どの「御仁」も実に腰が据わっている。笹野さんは平成の世において、それが出来る数少ない役者さんだと感じた。
そして宮崎あおい。本作では、ほんのりとした色気さえ漂っている。そして着物の着こなしの良さが際立っている。
襟元から首筋にかけてのラインが実に美しい。
　とくに御用学者の妻という役柄なので、その凛とした美しさをどう表現するか？　それをこの

若さで習得しているというのはすごい。更に終盤、夫に覚悟を迫るシーンの凄まじい迫力のあるセリフ、これは完全に主役の岡田君を食ってしまっていた。
「伊達に大河ドラマで主役を張った訳じゃないのよ」という凄みさえ感じられた。ここまでくると、完全に「格が違う」という感じである。
監督は「おくりびと」の滝田洋二郎監督である。手堅い演出と、これが映画を観る醍醐味なのだ、という絵作りをちゃんとしてくれている。大きな冒険はしないが、決して作品を破綻させることはない監督さんである。お金を払って観て損はない作品を必ず作り上げる人だ。
江戸時代、星を見上げ、日食、月食を予測し、正確な暦をつくろうとした人々のロマンを感じる佳作である。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
美術　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　滝田洋二郎
主演　　岡田准一、宮崎あおい、中井貴一
製作　　２０１２年
上映時間　１４１分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=Kb8yz-DNOmA

２０１２年１０月６日鑑賞

＊＊＊かりそめの「夢」売ります＊＊＊

西川美和監督の最新作を、公開最終日にようやく観る事が出来た。
今回の作品は、開店したばかりの居酒屋を火事で失った夫婦が、結婚詐欺に手を染める話し。今回も原案、脚本は西川美和監督のオリジナル。
前作「ディア・ドクター」、僕は初日に観に行った。神戸のミニシアターは満員で、何と、立ち見客まで出る始末だった。
西川監督の作り出したニセ医者、伊野という男。それは笑福亭鶴瓶という噺家との運命的な出会いによって、魅力溢れる人物像が描き出されていた。
また、笑福亭鶴瓶師匠自身も言っているように
「あの、過疎の村を見つけてきたスタッフが、この映画の”MVP”なんや」というぐらい、ロケーションが見事だった。
作品を観終わって、
「なんか、人間って切なくて、おかしくて、いとおしいものだなぁ」と思わせてくれた。気持ちがホッコリして映画館を後に出来る、素直にいい作品だと思った。
そして「ディア・ドクター」は多くの観客の支持を集め、様々な国内外映画祭の賞取りレースに名を連ねる事になったのである。
伊野という男は決して悪意があってニセ医者をやっていたわけではない。結果的に村の人々をだまし続けた訳だが、どこか憎めない男なのである。
さて、本作「夢売るふたり」はどうであろうか？
この作品、「ディア・ドクター」から更に一歩踏み込んで、人間の本性を暴き出す。そこに描かれるのは人間の「エグ味」であり「魔性」である。夫婦はふたりで計画的に結婚詐欺を働く。そこにはまぎれもない「悪意」がある。
始めに妻が夫に「詐欺師」の才能がある事を見抜くシーンがすごい。
夫が浮気をする。それを知った妻。夫は風呂に入っている。熱くなってきたからと水道から水を注ぎ足そうとする夫。
風呂釜の上にどかりと座った妻は、足でその水道の蛇口を向こうに押しやる。じわりじわりと湯攻め、心理戦に持ち込む妻の凄み。
こういう脚本、演出が出来る西川美和監督という人。
笑福亭鶴瓶師匠曰く
「西川美和はヘンタイです」
またあるひとは
「西川美和のなかにはオッサンがひとり入っている」とも言う。
女の一番見せたくない部分や、女だからこそできる「いやらしさ」みたいな部分を、本作では描き出してみせている。やがて妻は夫に結婚詐欺を働く様持ちかけ、シナリオを書き、監視まで

する。
本作は西川監督らしさはよく出ているのだが、なぜだろう？「華」がないように思えるのだ。作品を観ていて感じるのは「正直しんどい」という感覚である。
日本の女流映画作家として、今、この作品を創る意味が何処にあるのかと思ってしまうのだ。
3:11の震災以降、日本には「神も仏もいない」ということがさらけ出されてしまった。ただでさえ辛い世の中を生きて行く時、人々が求めるのは、辛い気持ちを分かち合い、寄り添い、支えあうことではないだろうか。そして今、必要とされるのは、なによりも、人を思いやるという、ごくあたりまえの行為であると思う。
痛みを共有し、和らげ、そして、こんな日本だけれど
「明日も生きていこう」と思わせてくれる感動を創造する。映画のみに関わらず、それがいま、表現者に求められているのではないだろうか？
本作では人間の「悪意」が、かりそめの「夢」を売る。
ある意味、「いまシアワセ」と言える人は、かりそめの夢をみている人か、あるいはそれこそ「悪人」なのかもしれない。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆
配役　☆☆☆
演出　☆☆☆☆
美術　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　西川美和
主演　　松たか子、阿部サダヲ、田中麗奈
製作　　２０１２年
上映時間　１３７分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=o6xZczEHGR4

２０１２年１０月１３日鑑賞

＊＊＊葉っぱビジネスとお年寄りパワー＊＊＊

徳島の過疎の村で、おばあちゃん達が年商２億６０００万円のビッグビジネスを実現させた実話に基づくお話。
年商２億６０００万円を稼ぎ出すというのは、普通の中小企業でもなかなか難しい事である。一体おばあちゃん達はどうやってそんなビジネスを成功させたのだろう？　そもそも何を商売しているのだろう？
じつはおばあちゃん達が売っているのは「葉っぱ」である。
そんな物がビジネスになるのか？　と誰もが思うが、都会のホテル、料亭、レストランでは、その「葉っぱ」を料理の「ツマ」「いろどり」として必要としていたのだ。
もちろん最初からこの商売がうまく行った訳ではない。
舞台は徳島県上勝町。若い農協職員（平岡佑太）は、この山あいの寒村の農作物を競り市で売るのに四苦八苦していた。
安い中国産にはとても勝てないのだ。
万策尽き果てた。彼はやけ酒を飲んでいたが、ある時料理屋で、料理の飾りとして「葉っぱ」が添えられている事にハッとする。
「もしかして、葉っぱが売り買いされているのか？」
彼は村人を集会所に集め、声をかけた。
「この村は、これから葉っぱを売りましょう」
村人はほとんどあきれ顔。
「そんなもん、商売になる訳ねぇだろ」
「まったく、街から来たよそモンは、なんも分かってねぇ」
とほとんどの人が帰ってしまう。だが、たったひとりのおばあちゃんが手を上げた。
「わたし、葉っぱ、やってみたい」
それが花恵さん（富司純子）である。彼女は幼なじみの薫（吉行和子）や路子（中尾ミエ）をさそって葉っぱビジネスを始めるのだった。
日本国中、いたるところに過疎の村、限界集落と言われるところがある。若者は全て街へ出てしまって、残ったのは年寄りだけ。
一体、なぜこんな事になってしまったのか？
政府がいかに日本の農業をないがしろにしてきたのか、怒りさえ感じる。それでも、あきらめずにおばあちゃん達は立ち上がった。
「私らにだって、まだまだひと花もふた花も咲かせられる」
三人のおばあちゃん達は幼なじみだ。
「花恵ちゃん、薫ちゃん、路子ちゃん」
お互い子供の頃の感覚で呼びあう。そう言うおばあちゃん達の心意気が楽しい。

若い農協職員の平岡君は「スウィングガールズ」以来でのスクリーンでの再会となった。役者として頑張っているなぁと感慨もひとしおである。
薫ちゃんの旦那役に藤達也。頑固で分からず屋、新しい事業を初めては失敗ばかりしている男の哀愁を感じさせてくれる。
この作品を観ていると、今、もしかして日本で一番元気なのは還暦を過ぎた熟年、シルバー世代なのかもしれないと思った。
この人達は高度経済成長の世代である。真面目に一生懸命働けば、いい暮らしになってゆく。それを実体験として持っている人達である。その人達がお年寄りと呼ばれ、もう世の中にとって要らない人達、すでに過去の遺産を引きずった人達、と片付けられてしまっていいものか？
むしろ、お年寄りの持つ、知恵や経験値を生かす道はないのだろうか？　それらは捨てるにはもったいない、あまりに貴重な財産だと思う。
上勝町のおばあちゃん達は年商２億６０００万円のビジネスを成功させた。だが、おばあちゃん達が葉っぱビジネスをはじめたのは、決してお金が目当てではなかった。
歳をとっても生き甲斐を感じる何かが欲しい、それがたまたま「葉っぱ」だったのだろう。
今静かなうねりを感じる地産地消。シルバー世代がもし同時多発的に各地で、スモールビジネスを立ち上げる様な、そんな世の中になれば、きっと日本の未来に「いろどり」をそえてくれることだろう。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
美術　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　御法川修
主演　　吉行和子、富司純子、中尾ミエ
製作　　２０１２年
上映時間　１１２分
　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=HiUDpyzLlJ8

電信柱エレミの恋

２０１２年１０月３１日鑑賞

＊＊＊中田監督、ステキな作品をありがとう＊＊＊

神戸アートビレッジセンターの上映&展示会で鑑賞した。
その折に本作の中田秀人監督と、立ち話ではあったが３０分程もお話させて頂いた。
一期一会の出会いに感謝である。
この作品の映画レビューを客観的に書こうなどという事は、もはや出来ない。
僕は中田監督の情熱と、映画への愛と、人間としての優しさにノックアウトされたのだ。
だから当然このレビューについては褒めちぎる事になってしまう。
その事をあらかじめお断りしておく。
電信柱が人間に恋をするというこのお話。
多分、表現の方法としてはこの「コマ撮りアニメーション」という技法が一番ピッタリ来るんじゃないかと思う。
「エレミ」という可憐な名前からも分る通り、主人公の電信柱はお年頃の女の子である。
故障してしまった彼女を修理してくれたのが、電気工事会社の「タカハシ君」と言う若者だ。エレミは自分を修理してくれたタカハシ君と一度話をしてみたいと思う。
電信柱のネットワークを利用して、彼女は人間の女性を装ってタカハシ君に電話をかける。やがて「エレミ」はタカハシ君に恋心を抱くようになってゆくのだが……。

スクリーンを観ながら、僕は映像と音楽が見事に融合したこの作品に惹き込まれた。
体の中に染み込んでゆく様なハープとギターの音色。
本作の音楽は、中田監督が星の数ほどある音楽グループの中から奇跡的に巡り会った「tico moon」という男女二人の演奏家グループが担当している。
ワインを嗜む方ならご存知だろうが、ワインと料理の組み合わせ、その絶妙な出会いを「マリアージュ」という。
ワインと料理の「結婚」である。
１＋１が３にも４にもなる。お互いの味と香りを高めあう。
「エレミ」は「tico moon」という素晴らしい音楽グループとの出会いによって、まさに極上のマリアージュを実現している。
この作品で僕が特に強く印象に残ったのは、電信柱の元で黒猫がクルマにはねられてしまうシーンだ。
　はねられた黒猫は地面に横たわっている。そこに小学生の女の子が通りかかる。少女は黒猫をじっと見つめる。そして一度立ち去る。だが彼女は戻ってくる。手にはティッシュペーパーの箱を持っている。黒猫の体からは血が染み出してきている。
少女はこの黒猫にティッシュを一枚、また一枚とその体にかけてあげるのである。
真っ白なティッシュに、少しずつ染み込んでゆく、真っ赤な真っ赤な、黒猫の血の色。

　なんと言う厳かで悲しみに満ちたシーンなのだろう。
小学生の女の子が思い悩んだ挙げ句、取った行動。
「白いティッシュのお葬式」
残酷さと、悲しさと、優しさと、そして美しさが、僕の心を直撃した。
この「エレミ」で僕が最も感じたのは「命」ということである。
一匹の野良猫の「命」それにお葬式をしてあげた少女の「命」
そして電信柱である「エレミ」にも「命」があり、「タカハシ君」と命の会話をする。
この４５分のコマ取りアニメーションは、様々な解釈が出来る。
優れた芸術作品にはある特徴がある。
それは鑑賞する人が百人いれば、百通りのバラバラな感想を持つ事が出来るという事だ。
それでいいのである。それこそが豊かなイメージを内包した、真に優れた芸術作品の特徴なのだ。
中田監督との会話の中で印象的な言葉があった。
「僕は映画を作る時、遥か遠くに”フラッグ”を立てるんです」
どんな映画製作でもそうだと思うが、「映画を作ろう」なんて言う集団は、ある意味「狂気の集団」である。
「まったくそのとおりです」中田監督は言った。
ましてや本作は、人形を一コマ分動かしては一コマ撮影するという、気の遠くなる様な作業工程が必要な映画作品なのである。
　本作は中田監督の知人である井上英樹氏が原作を書いた。中田監督はその原作「電信柱電子の恋」を読み、製作を決意する。「これは映画化に挑戦してみる価値ある作品だ」と。
当初四年ぐらいはかかるだろうという予測を立てていたとの事。そして中田監督はその四年先の”フラッグ”に向け、時間も、お金も、私生活もつぎ込む、と言うスタッフを集め「狂気の集団」を動かし始めたのである。
結果、なんと８年という歳月が費やされた。しかし、中田監督が遠くに立てた”フラッグ”はまったくぶれる事なくゴール地点に立っていたのである。
僕は中田監督のその勇気と情熱に拍手を送りたい。
最後に、いち映画バカである私の話しに、熱心に応えてくれた中田監督に感謝します。本当にありがとうございました。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆☆
美術　☆☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

作品データ

監督　　中田秀人

原作　　井上英樹

音楽　　tico moon

声の出演　奥村知子、渡辺一志、エムラスタ

製作　　２００９年

上映時間　４５分

　予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=y1rk8HcnO1c

アウトレイジ ビヨンド

２０１２年１１月１８日鑑賞

＊＊＊ヤクザ映画監督で終わるのか？コノヤロー＊＊＊

観てみたかった北野武監督の「アウトレイジ　ビヨンド」をようやく観た。
前作「アウトレイジ」では、ビートたけし演じるヤクザの大友が、刑務所の中で刺されるという結末だった。その大友が、実は生きていたという前提でこのストーリーはつくられている。
大友はやがて出所してくる。そしてかつては敵対していた木村と組んで、関西のヤクザの大組織「花菱会」の後ろ盾を得る。そして二人は、かつての恨みを晴らすべく、関東の巨大組織「山王会」に殴り込みをかける。
もともとは復讐に乗り気ではなかった大友。彼を焚き付け、巨大なヤクザ組織同士を闘わせるように仕組んだのが、警察の暴力団対策の刑事、片岡（小日向文世）だった。
実はこの作品の実質的な主人公は、大友ではなく刑事の片岡だ。
彼は限りなくブラックに近いグレーな刑事だ。その切れ味鋭い悪巧みに、観ている観客はちょっとした快感すら覚えてしまう。
片岡刑事は出世のためなら、どんな汚い手も使う。彼もまた、ヤクザ同様、権力ゲームが面白くて仕方がないのであろう。
ヤクザというのは体面を重んじる。虚栄心の塊と言っていい。
相手より立派なクルマ、相手より高級な腕時計、スーツ、さらには相手より立派な組事務所。とにかく見栄の張り合いをやりたがる。
　余談だが、僕は一時、建設業界の使い走りの営業をやっていた事がある。公共工事の入札の日の光景は、今思い出しても、おぞましい。市役所の駐車場にずらりと並んだ黒塗りの高級車。肩で風を切って市役所内を練り歩く業界の顔役達。
それは全くこの「アウトレイジ」の世界そのものだった。
現実の世界で僕はそのような光景を見て、そしていま「アウトレイジビヨンド」を観ている。
　映画作品は当たり前の話しだが、作り物であり、虚構の世界である。本作は「ヤクザ映画」として確かに良く出来ている。ストーリーはよく練られているし、キャスティングも抜群にいい。一部で取り沙汰された残虐なシーンというのは、僕の見た限りでは、前作よりマイルドな仕上がりだと思う。
本作が”並の”監督作品なら絶賛に価する。
問題はそんな事ではない。
本作は世界の「キタノブランド」なのである。
実はこれが最も大きな問題なのだ。
北野監督はいつまでヤクザ映画を撮り続けるのか？
ただの「ヤクザ映画の監督」で終わっていいのか？と僕は思う。
たしかに映画製作は大変リスクの高い仕事である。
売れない映画は抹殺されてしまう。売れない映画をつくった監督はもう次の作品をつくれなくな

ってしまう。
　そういう映画界では売れる作品しかつくらない、売れる映画しか金は出さない、という風潮になってくる。
本作「アウトレイジ　ビヨンド」にもその風潮が見て取れなくはないのだ。
いったいこれでいいのだろうか？
５０年先、１００年先に残る作品は今生まれているだろうか？
１００年前のチャップリンの作品は今観ても笑えるし、６０年前の「七人の侍」は今観ても抜群に面白い。
僕がこんなことを言うのも、北野監督がそう言った名作、傑作をつくれる可能性を持った監督だからだ。
なお、本作「アウトレイジ　ビヨンド」は、僕の住む街、神戸で多くのシーンが撮影されている。神戸市が撮影協力した事はとても嬉しい事だ。ただ気になった事がある。
　僕が本作を観たのが興行的にそろそろ終盤だった事もあるのだろう。観に行った神戸のある映画館には、本作のPOP、広告や、神戸でロケーションされた事の告知ポスター等はひとつもなかった。本作のあるシーンでは、その映画館が入ったビルそのものが見事に映っていたにも関わらずだ。
まさにこれが映画を取り巻く現実なのである。
僕たち映画ファンはもっともっと映画を応援したいと思う。
その第一歩は映画館に足を運んで、スクリーンで多くの観客と一緒に映画を楽しむという事である。
本作「アウトレイジ　ビヨンド」ではヤクザ社会で、したたかに生き抜く男達の群像が描かれている。その悪戦苦闘ぶりは、なぜか僕には、映画業界で生き抜く、北野監督の姿にダブって見えてしかたなかったのである。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆５点満点です）
物語　☆☆☆☆
配役　☆☆☆☆☆
演出　☆☆☆☆
美術　☆☆☆☆
音楽　☆☆☆☆
総合評価　☆☆☆☆
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
作品データ
監督　　北野武
主演　　ビートたけし、小日向文世、西田敏行、三浦友和
製作　　２０１２年
上映時間　１１２分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=ha_6-xS3WwE

２０１２年映画ベスト５選考基準

さて、２０１２年、僕が観た作品の中から、独断と偏見で「これは！！」という作品ベスト５を取り上げたいと思います。

選考基準は以下の通りです。
①映画館でもう一度見たい作品であること
②DVDをコレクションしたい作品であること
③上記二点を両方満たす作品であること

では洋画部門から発表です。

２０１２年洋画ベスト５

第一位「アーティスト」

第二位「戦火の馬」

第三位「コッホ先生と僕らの革命」

同三位「最強のふたり」

第五位「ソハの地下水道」

以上です。
続きまして邦画部門です。

２０１２年邦画ベスト５

第一位「BRAVE HEARTS 海猿」

同一位「テルマエ•ロマエ」

第三位「あなたへ」

第四位「鍵泥棒のメソッド」

第五位「鬼に訊け 宮大工 西岡常一の遺言」

次点「アウトレイジ　ビヨンド」

邦画部門は以上の結果となりました。それでは２０１２年の映画を振り返って講評させて頂きます。

洋画部門ですが、僕の一番のお気に入りは、なんといっても「アーティスト」なんですね。３D映画全盛の２１世紀の現代に、あえてモノクロ、しかも無声映画という大胆な手法をとりいれたこと。そしてなにより、それが映画を観る楽しみを再発見させてくれたことに、敬意を表したいと思います。この映画を創ろうという勇気ある行為に僕は拍手を惜しみません。
第二位の「戦火の馬」
さすがスピルバーグ。映画監督としての手腕は全くさび付いていません。「写真」（故黒澤明監督は自分のとった映画を”シャシン”と呼んでいました。）の撮り方が素晴らしいんです。他の映画監督はもっとスピルバーグに学んでほしいですね。
「コッホ先生と僕らの革命」と「最強のふたり」はもう、本当に甲乙付けがたい素晴らしい作品です。よってどちらも三位ということにさせて頂きました。第五位に入った「ソハの地下水道」女流監督アグニェシカ•ホランド監督の大変な力作です。是非、鑑賞をお勧めします。

さて、邦画部門

第一位が二作品ということになりました。しかも、どちらの作品もフジテレビ系列の作品なんですね。
「テレビ局が作った映画なんて……」とコアな映画ファンはお思いでしょうが、僕はとても感動致しました。
どちらの作品も、映画とはどういう表現方法なのかを熟知している監督がとっているんですね。だから「絵」の力があるんです。「BRAVE HEARTS 海猿」はおそらく「海猿」シリーズの中でも最高傑作でしょう。上映時間１１６分というのも大変優れた編集であることを物語っています。無駄なカットはひとつもありませんね。
また、「テルマエ•ロマエ」は、あの「のだめ」シリーズを撮った監督さんなんです。優れた原作、脚本があって、そして適材適所のキャスティングが絶妙でした。これも上映時間１０８分。出演の皆さんの顔も濃い人ばかりですが、作品の中身もギュッと濃いのです。

第五位に入りました「鬼に訊け 宮大工 西岡常一の遺言」は宮大工の棟梁、西岡常一さんの貴重なドキュメンタリーです。これは是非後世に語り継ぐべき偉業です。それを映像化した意義は大きいものがあります。仕事とはどう取り組むべきなのかを優しく、そして厳しく我々に伝えてくれます。建築に興味のある方、そして表現を仕事にされておられる方には、是非ご覧になることをお勧めします。
なお、セカイのキタノブランドである「アウトレイジ　ビヨンド」は次点とさせて頂きました。
「私はあの作品が一番好きだ」「僕はこの作品を推したい」「なんで、あの作品がランクインしてないんだ」と仰る方も多いと思います。
あくまで私、天見谷行人の独断と偏見に基づく２０１２年映画ベスト５です。ご意見お持ちの方

はお気軽にコメントお寄せ下さいませ。映画についてのご自分なりの率直な感想や意見を持った時点で、既にあなたは立派な映画ファンになっておられるとおもいますよ。
ではまた、映画館でお会いしましょう。

映画に宛てたラブレター２０１２

http://p.booklog.jp/book/67127

著者：天見谷行人
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/67127

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/67127

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ